



心の糧

編集長

ドイル・L・グリーン



6月のこよみ

- 4日 1837年 英国伝道部開設さる。
- 9日 1830年 教会設立後最初の大会が
ニューヨーク・フェイヤ
ットで開かる。
- 10日 1875年 YMMIAが組織さる。
- 27日 1844年 ジョセフ・スミスとハイ
ラム・スミス殉教す。

本誌の成否は、ページ数やサイズ、割り付け、挿し絵、あるいは使用されているカラーによって決まるのではない。長い目で見て、読者に何を与えているかによって決まるのである。教会のこの機関誌によって祝福を得たという数多くの手紙の中から、ひとつを紹介しよう。

投書者はソルトレーク盆地内のあるワード部のYMMIA会長である。彼は教会員の家庭に生まれ、バプテスマを受けたが、青春の日々を気ままに送っていた。やがてひとりの末日聖徒の少女と恋におち、神殿には行けなかったが彼女と結婚した。彼女は彼の悪い習慣をやめさせ、教会に興味を持たせようとしたが、彼は依然として教会にはよい気持を抱いていなかった。

ある晩、子供たちが眠り、妻が集会に行っている間に、彼は居間にすわってタバコをくゆらしながら、何気なく教会の雑誌をとりあげ、パラパラと目を通し始めた。ページをめくっているうちに、2人のボクサーが拳闘をしている絵の入ったひとつの記事に目がとまった。彼はスポーツが好きであったので、ボクシングの話だろうと思い、その記事を読み始めた。しかし案に反して、それは喫煙の習慣を克服して自分や家族にどんなことが起こったかを述べた経験談だったのである。

読み終わった彼は、愛する妻子のことを思いながら、タバコのけむりがただよう室内を見まわし、半分ほど埋もれた灰皿とヤニのついた指をみつめ、これからはタバコを吸うまいと決心した。そして残っていたタバコの箱を集めてゴミ箱に投げ入れ、以後決心した通りに2度とタバコを手にしなかった。彼は他の悪い習慣をも努力して克服し、やがて什分の一を納めるようになり、しばらくして妻子を伴い、主の家で今も永世にも結び固められたのであった。

— も く じ —

我々の証を強める「聖徒の道」…ジョセフ・フィールディング・スミス大管長…	149
教会と教会誌…編集長 ドイル・L・グリーン…	151
召しと解任…ジョセフ・F・スミス大管長…	154
子らを教える人々へ…ヒーバー・J・グラント大管長…	155
主のみこころをうかがえ…ジョージ・アルバート・スミス大管長…	157
求婚時代と結婚…デビッド・O・マッケイ大管長…	158
わが主キリスト…ジェームズ・E・タルメージ長老…	160
ニュージーランドに起こった奇跡…ローリン・F・フィールライト…	162
予言者となった詩人…ウェンデル・J・アシュトン…	163
すばらしい朝…ルーシー・C・リーディング…	166
アルマとなることの大切さ…ロバート・スペンサー…	167
若人とは…J・ルーベン・クラーク・Jr…	168
教会は真理を独占しているのか…ジョン・A・ウィットソー長老…	171
家庭の夕べ…ジョセフ・F・メリル長老…	172
扶助協会の組織…ベル・S・スパッフォード会長…	174
少年とクモの巣…ノラ・アン・リチャードソン…	176
伝道部だより…リチャード・L・エバンズ…裏表紙	178
自己を見つめる…	

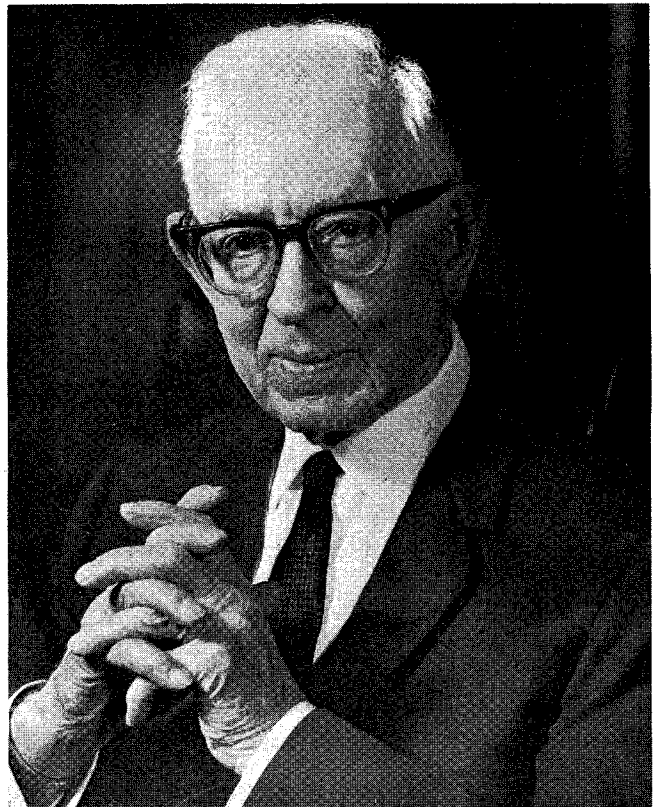
表紙について

今月もウィリアム・ウィタカ画伯による絵である。ウィタカ兄弟の描くのは、かの1823年秋、9月22日の朝のジョセフ・スミス父子である。天使モロナイから教えを受けた少年ジョセフは、畑にいる父の所へ行き、昨晚の間に見た示現や受けたいましめのことを話した。父は熱心に耳を傾け、ジョセフが話し終るとただ一言、「これはまさしく神ごとである。その使者の言いつけ通りに行ってせよ」と言ったのである。(ジョセフ・スミス2:48—50参照)

我々の証を強める

「聖徒の道」

ジョセフ・フィールディング・スミス
大管長



教会の「聖徒の道」の今月号は、終わりをもち初めをも意味する。1967年におけるその初版から「聖徒の道」には「インプルーヴメント・エラ」、「インストラクター」、「扶助協会誌」、「チルドレンズ・フレンド」から選ばれた記事が載せられてきたが、これらの雑誌は1970年12月号をもって廃刊となったのである。

家族を強くしようとの意図をもって、教会の土台とも言うべき大管長会と十二使徒定員会は3冊の雑誌を新たに発行することに決定した。成人のための「末日聖徒イエス・キリスト教会のエンサイン」、青少年のための「ニュー・エラ」、子供のための「フレンド」が1971年1月から発刊されたが、4月からは愛する兄弟姉妹の家庭に、「エンサイン」と「フレンド」から選り出された記事が載せられた聖徒の道がとどけられている。またその翌月にはその2誌に加えて、世界中の教会の若人が読めるように「ニュー・エラ」の記事が載せられている。

みなさま方のすべてが家庭で「聖徒の道」を購読されるよう、勧めるものである。それは日本語を話す人々にとって唯一の公的な教会誌である。これより先、この本を読み、そこから得られる偉大な真理を生活に生かしていただきたい。この雑誌は家庭の夕べのテキスト、神権および補助組織のテキスト、また教会標準聖典を学ぶ上で大きな助け、大きな力の泉となるであろう。実に、我々は今の時代にあって、永遠の生命と救いに導く靈感に満ちた指導書を持っているのである。

多くの人々が教会の雑誌を終生の友としてきた。長年にわたり、それらの本は我々に何を与えてきたことであろう。世界中の教会員にどのような助言と喜びをもたらしてきたことであろう。

私の父である教会の第六代目大管長ジョセフ・F・スミスは、教会雑誌が強固な家庭とゆるがめ証を築くということを充分承知していた。彼は「インプルーヴメント・エラ」と「ジュブニル・インストラクター」

の編集長となったのである。

父は私の知っている限りで最も心のやさしい人であった。彼はしいたげられた人々や悩む人々に対していつも同情を寄せていた。特に子供を深く愛していた。あらゆる子供たちを愛しており、子供が虐待される光景などはとても見ていられない人であった。

彼は義の説教者であり、その言葉の真心は人々の心を刺し貫いた。彼は確固とした信念に支えられた権威と、真理の知識から生まれた確信を持つ人として語った。その証には疑いやあいまいさはみじんもなかった。それは特に、救い主の神性や叔父である予言者ジョセフ・スミスの使命について語る時に顕著であった。

父のかたわらに座って福音の原則や教えを聞いた時のことは、私にとって最もなつかしい記憶である。こうして、私自身の知識の土台は真理に基礎を置かれたのである。そしてそれがゆえに、私の贖い主は生きておられ、ジョセフ・スミスは生ける神の予言者であると声高く言えるようになったのである。

私はジョセフ・スミスやブリガム・ヤングが予言者の召しを受けているという証を幼年時代に得た。父が親しかったヤング大管長は私が1才の年に他界したが私は年若い時にジョン・テイラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ロレンゾ・スノー各大管長を個人的に知った。

エラの編集者として働いていたヒーバー・J・グラント、ジョージ・アルバート・スミス、デビッド・O・マッケイの各大管長は、私が使徒に聖任された時、十

二使徒評議員会の会員であった。私は彼らがみな、この地上に神の王国である教会を打ち建てることに恐れを知らぬ、神より選ばれた人々であることを知っている。

どの時代にあっても、個人個人の証こそ、末日聖徒イエス・キリスト教会の力である。証は家庭において最もよく育まれるが、証をいったん持ち得たとなるとそれは祈りや、古代近代の書物に記録された予言者らの言葉を学ぶこと、教会にあって働くことなどにより教会の集会の中でますます強くされていくのである。

「聖徒の道」は、日本語を話す人々が、各家庭で互いに証を得るよう助け合うための強力な補助手段である。ここで忘れてならないことは、証を得、証を保つのは、家庭内での仕事だということである。家族の持つ証をさらに強めてくれる物事は、すべておろそかにしてはならない。

私は、長兄イエス・キリストが現在地上で働きを進めているこの教会の頭であり、キリストが教会の諸活動を指揮したもうこと、選ばれたしもべたちから与えられる助言や勧告にいかにも忠実に従ったかによって我々に祝福を与えられることを知っている。

我々ひとりひとりが教会の指導者たちと教会誌を支持するよう、心より祈るものである。

今月号では「インプルーヴメント・エラ」、「インストラクター」「扶助協会誌」、「チルドレンズ・フレンド」等の過去の雑誌からの記事がとりあげられていることを喜ぶ次第である。

編集長ドイル・L・グリーン

教会と教会誌

編集長 ドイル・L・グリーン

この神権時代における教会の初期から、書物は欠かせぬ役割を演じてきた。1820年の早春ジョセフ・スミスは聖書の言葉から聖なる森へ導かれた。そして金版に刻まれた文字は、翻訳されてモルモン経という書物になり、聖書を証し、貴重な福音の真理を人に啓示した。さらに啓示は教義と聖約に、歴史の書と教えは高価なる真珠になり、教会標準聖典となった。

新聞雑誌などの定期刊行物も、福音の回復と教会設立に決定的な役割を果たした。そのうちのあるものは長く続き、あるものはすぐに廃止されたが、教会をとりまく状況と必要の程度に従って変遷をたどったのである。

教会の刊行物の歴史を調べてみる人は、かつて私もそうであったように、教会歴史が比較的短い割に非常な数の刊行物が発行され多くの変遷を経てきていることに驚くに違いない。

組織が「声」を持つことは大切であるが、1830年4月6日に予言者ジョセフ・スミスにより神の導

きのもとに組織された年若い末日聖徒イエス・キリスト教会にとって、啓示される主のみ言葉を教会員、非教会員に広める手段を持つことは特に大切であった。

教会歴史記録第1巻には「大会が開かれ(1831)、W・W・フェルプス兄弟がミズーリへ行く途中、ミズーリ州ジャクソン郡インデペンデンスにおいて、「イブニング・アンド・モーニング・スター」と呼ばれる月刊の新聞を発行するため、シンシナティ(オハイオ)にとどまり、印刷機とタイプを購入するよう指示された」(英文P217)と記されている。

これが教会発行定期刊行物の最初である。1832年2月にフェルプス兄弟から出された発刊趣意書には、主の目的を遂げる時が急速に近づいていると述べられていた。

「よって、主をおそれ、あらゆる国家、国民、国語、民族に真理を広めるためをもって、この新聞は発行され……」とそこに記されている。また編集者は、「イスラエルが神の恩恵にたちかえるその先駆である上に、永遠の福音の伝え

手として、(この新聞は)神の聖徒たちを霊的にも物質的にも益する真理や情報をも内容に含む」

(教会歴史記録英文1:259)と書いている。

1832年6月、当時としては合衆国内の他の印刷工場から190キロも隔たった西部の一工場から第1号が発行された。その新聞は以来14か月間、印刷工場が暴徒に襲われて印刷機やタイプが壊された1833年7月20日まで続いた。

しかしなおも教会はその「声」を必要としていたため、1833年12月はオハイオ州カートランドにおいて、別の印刷機を手にいれ、オリバー・カウドリのもとに再び出版を始めた。それはほんの10か月ほどで装いを改め、名称は「末日聖徒メッセンジャー・アンド・アドボケート」となった。

この出版物の第1号には、特に教会の教義の重要点がオリバー・カウドリの署名を付して載せられている。フレデリック・G・ウィリアムズとのちには予言者ジョセフ・スミス自身がこの新聞の発行者となった。「末日聖徒メッセン

ジャー・アンド・アドボケート」は36版発行され、主として教義的内容が多く、教会員の信仰と教育に多大の貢献をなした。

1837年10月には名称が再び変わって「エルダーズ・ジャーナル」となり、ジョセフ・スミス Jr., トーマス・B・マーシュ, ドン・カルロス・スミスその他を編集者、発行者とし、1838年8月まで続いた。

これらの兄弟たちが迫害の激しい時期にいかなる困難のもとに出版物を発行したかは、我々のとうてい想像できぬことである。彼らはカートランドで「エルダーズ・ジャーナル」を2回発行しただけに終わってしまった。というのは、その年の11月に暴徒たちによって印刷場が焼かれ、印刷機もタイプも壊されてしまったからである。1838年の夏にミズーリ州ファーウェストにおいて出版が再開されたが、またも暴徒の活動が激しくなったため、2号が発行されただけであった。

サムエル・D・ルーカス將軍指揮下に2000人がファーウェストをとりかこみ、町のあけ渡しをせまったのは1838年夏のことであった。兄弟たちはまたも貴重な印刷機を失うことを予想し、それを隠すことに決めた。そして夏のうちにドーソン兄弟の家の裏庭に穴を掘り、建物から機械を持ち出してその穴に埋め、タイプといっしょに土を土でおおった。やがて1839年春に機械は掘り出され、馬車で

イリノイ州ノーヴーへと運ばれた。修理されたのちにその機械によって「タイムズ・アンド・シーズンズ」の出版が開始されたのである。「タイムズ・アンド・シーズンズ」について予言者ジョセフ・スミスは日記にこう記している「1839年6月、彼（ドン・カルロス・スミス）は『タイムズ・アンド・シーズンズ』印刷の準備を始めた。印刷機とタイプは、ルーカス將軍と暴徒の軍が町をとりかこんだ晩から安全を期して埋められていた。ファーウェストのドーソン家の庭から掘り出され、エライアス・スミス、ハイラム・クラーク等により修理された。『エルダーズ・ジャーナル』作成のための組版はインクをつけて埋められていた。タイプは泥でひどく破損されていたのでできる限り早く使用できる状態にしなくてはならなかった。そのために常に水がしみ出ている地下室を、機械を据えつけられる唯一の場所として清掃しなくてはならなかった。」(教会歴史記録4:398)

「タイムズ・アンド・シーズンズ」はドン・カルロス・スミス、ジョセフ・スミス Jr., ジョン・テイラー等を編集者として立派に作成され、ドン・カルロス・スミスおよびエビニザ・ロビンソンを発行者として、聖徒たちがノーヴーを追われる時まで続いた。131号にものぼる「タイムズ・アンド・シーズンズ」は、ノーヴーの発展と教会の進展をくわしく語るも

のである。そこには、福音とそれに関連した記事が数多く載せられ、伝道地からの便りや末日聖徒の関心事も記された。

1845年10月4日、聖徒たちがノーヴー立ち退きを強制された際にリチャーズ長老は「『タイムズ・アンド・シーズンズ』の次号の発行を見送り、大会の議事は『ノーヴー・ネイバー』に掲載した。」

(教会歴史記録7:454) (「ノーヴー・ネイバー」は教会の週刊紙であった。)

1840年、十二使徒の大半は英国にいて定員会として仕事を進めていた。彼らは5月に「ミレニアル・スター」の出版を開始した。この発刊趣意書には、「時代の政界商業界のニュースとは接触を断つ。その欄は、完全な福音を広めキリスト教における古の原則を回復し、イスラエルを集合させ、国々に神の王国を行きわたらせ、時のしるしとなり、予言の成就となり、天に奇跡を見せ、地にしるしを、すなわち、血と火と立ちこめる煙とを見せる神の裁きを記録し、……地上におけるキリストの統治の先駆けとなるべく献身するのである。またそこには、アメリカ、ヨーロッパでみ言葉を宣べ伝える数多くの長老たちからの便りと、栄ある福音の祝福をほどす成功の知らせを載せるものとする」とある。(教会歴史記録4:133) この出版物はまさに現実的な方法をもってこれらの高貴な理想を具現したのであった。

聖徒たちがかの大旅行によってロッキー山脈の西部にたどりつくと、アイオワ州ケネスビルのオルソン・ハイドにより「フロンティア・ガーディアン」との名称のもとに新聞が発行された。それは月2回発行され、3年間続いた。

1850年、合衆国西部山間では最初の新聞として「デゼレト・ニューズ」が発行され、それ以来1世紀以上にもわたり教会の機関新聞となっている。この新聞は初めの何年間は週刊紙であったが、次に週2回の発行となり、やがて日刊となった。

教会は、必要に応じてそのつど他にも多くの出版物を出してきた。

教会の補助組織のために出された最初の出版物は、1866年に創刊された「ジュブニル・インストラクター」である。それは1900年に日曜学校所有となった。「ジュブニル・インストラクター」はおもに子供向けの雑誌であったが、1930年に名称を「インストラクター」と変え、主として日曜学校役員教師のための機関誌になった。

YM相互発達協会には、1879年から1896年までYMMIA向けに刊行された「コントリビューター」があった。その1年後に「インプルーブメント・エラ」が始まり、1929年には「エラ」が、1889年以來YWMIAにより発行されていた「ヤング・ウーマンズ、ジャーナル」と合併した。

扶助協会は1872年から1914年ま

で「ウーマンズ・エキスポネント」と呼ばれる雑誌を出版していた。1915年1月をもってその雑誌が扶助協会誌と変更され、1970年12月まで扶助協会の機関誌として続いた。初等協会中央管理会発行の月間誌「チルドレンズ・フレンド」は1902年に始まった。1967年には、英語以外を国語とする国々の雑誌に画期的な変化があった。その年の3月にヨーロッパの9か国語で統一機関誌第1号が出版された。他の伝道地の指導者たちがその価値と将来性に目を留め、やがてその他の国語も加わり極東やポリネシアを含む他地域へと広がっていった。現在はアメリカンディアンのための英語版を含めて17か国語で発行されている。

しかし1967年に、非英語国民の聖徒たちに対する教会出版物が初めて出されたのではなかった。世界中に伝道地が開かれるにつれ、聖徒たちに教会の進展を知らせ、教会指導者からの靈感と慰めの言葉を伝える定期刊行物が出されていたのである。それらの出版物の歴史をたどる人は、そこに世界各地の聖徒たちによる勇気と犠牲の偉大な模範を見ることであろう。そこには輝かしい歴史を持った雑誌も短命に終わった雑誌もある。たとえば星という意味のドイツの「デア・ステルン」は聖徒の道の始まる1世紀前、1869年に創刊され、ドイツ語を話す人々の間に幾多の貢献をなしつつ、栄光の歴史を刻んできた。「スペインのリア

ホナ」は1945年に、フランスの「レトワール」は1926年に創刊された。また我が国の統一機関誌の前身である「聖徒の道」は、1957年6月以来、北部極東伝道部より出版されローカル誌として長く親しまれ1968年3月号から新しい「聖徒の道」に生まれ変わった。

統一機関誌の目的は、各地の聖徒たちにできる限り多く教会プログラムを伝えることである。1967年の創刊以来1971年4月号までは、「インプルーブメント・エラ」、「インストラクター」、「扶助協会誌」、「チルドレンズ・フレンド」の4誌からとられてきたが、今や教会の雑誌史に新しいページが加えられた。1970年にこれらの英語4誌が廃刊となり、「ミレニアル・スター」の場合と同様、新しい3誌すなわち成人教会員のための「末日聖徒イエス・キリスト教会のエンサイン」少年のための「ニュー・エラ」、子供のための「フレンド」に変わったのである。これら1971年1月から登場した新しい雑誌は、大管長会および十二使徒評議員会のもとに発行され、相互調整された教会出版物として大きくひとつにまとめられたものである。聖徒の道はこれらの雑誌からその記事をとっている。

大管長会は「エンサイン」および聖徒の道が各家庭に置かれ、月毎に教会指導者の声が届くように望んでいる。

これはまさに、靈感によるプログラムである。

召しと解任

ジョセフ・F・スミス大管長

エラ, 1907年7月号



ジョセフ・F・スミス
大管長, 教会第6代目
大管長 1901—1918

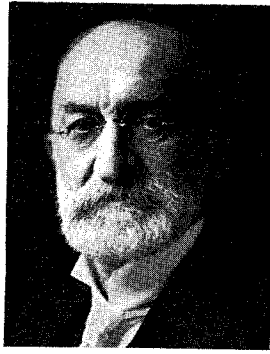
全 末日聖徒は、教会がどんな人間よりも大いなるものであって、いかなる時にも人に先立って考えられねばならないことをよく承知している。人は死ぬ。だが神の大義たる教会は永遠に残るのである。教会に対する忠誠は末日聖徒の特徴である。教会のためとあらば、必要とされるどんな犠牲をもちとわない。良き末日聖徒は教会発展のために喜んで働くのである。毎年何百という宣教師が召され、2年、3年、あるいはそれ以上の間、世の中に出で行きさまざまな働きに携わる。彼らが働きを終えたとまた新たな人がその職につき、彼らは別の仕事待つ家へと戻るのである。真心をもって尽くした仕事からの解任は、彼らにとって不服でも不満でもない。

家庭にあって、兄弟たちは監督会、ステーク部長会その他教会での働きに召される。そしてまた彼らの働きが完成され、あるいは教会にとって必要とされる時に、彼らは解任されて他の人がその働きに任命されるのである。自分の責任を充分に尽くした人々にとってその解任は外国伝道から解任されるのとまったく同様に、不名誉ではない。年をとって骨の折れる教会の仕事が肉体的に無理になった時は、体力のある若い人々

や負担の多い仕事に耐えられる強い人々が選ばれてその職を果たすべきである。そのようにして責任を解任されることはまったく不名誉でも不面目でもない。

教会の兄弟たちは、管理の権能を持つ人々から「みたま」による靈感を通して役職に召される。人が地位や役職を求めたり願ったりするのではない。また神権の職を辞任するというようなこともない。全員が、教会にとって良いと思われる場合に、その権能を持つ人々から受ける召しや解任に備えて、自分を整えておくのである。教会の役職は、実業界や政界とは異なっており、辞職願いは認められない。それゆえ、神権の召しを受けたすべての人は、辞職を望むべきでないのである。正しい精神を持つ者には、教会にとって最もよいとされるならば喜んで胸を張り職から解任される用意が、常にできているはずである。彼は自分の役職も召しも権威ある者の手中にあると知って、そのような気持を兄弟たちに知らせるべきである。個人的な理由でやめたいと思う場合や、自分がやめることが一番よいと思われる場合には、幹部に願い、責任を受けた人に知らせると、彼らの知恵と主による靈感の命じる時にその責任を解かれるであろう。そのような場合以外は、無分別やわがままで教会の発展を阻んでいると言う他はない。このような事柄においては、権威ある人々が第一に考えられなくてはならない教会と個人の福利を念頭に、よく熟考するのである。

このことは実に重要である。ある人々はいったん教会の職を得ればそれが生涯続いて、もし解任でもされるならば、その人の評判や面目を損う不名誉であると考えている。それはまったくの誤りである。役職にある人は、聖任や任命をする者が職を移したり解任したりする権能を持っており、そのような時に何の不名誉も不面目もないことをよく承知していなくてはならない。教会で何らかの職を持つ人はすべて、もしも自分で最良の働きをしておらず、管理する人々もそう考えるならば、いつでもどこでも解任されるとの心構えを常に持つべきである。召しと解任における管理者の権能と知恵を我々は認めねばならない。すでに述べたように、伝道部長会や宣教師や監督会から解任されるのと同様、教会のどのような職であっても、解任は不名誉でも不面目でもないのである。



ヒーバー・J・グラント
大管長 教会第7代目
大管長 1918—1945

子らを教える人々へ

ヒーバー・J・グラント大管長

エラ, 1939年3月号

イエス・キリスト教会で子供たちのために働くことほど、天父の目にかなう働きはない。幼い子供や少年少女の心に刻まれた印象が、他のどの年代に受ける印象よりも深く消えない影響を将来に残すことは疑いない事実である。たとえてみれば、それは書きたいことをそのまま何の邪魔もなく書ける一枚の白紙に文字を記すことである。

若い時代に天父の目にかなわず、自分のためにも良くないことをなしながら、のちになって人生の闘いにすばらしい記録を残した人は多いが、もし人生の闘いの初めから年月というページに善行と信仰を育む思いだけが刻まれるならば、はるかによいことであろう。「枝がたわむにつれて木も傾く」ということわざがある。教会の子供たちを教えるあなた方は枝をたわます働きに携わっているのである。

子供が8才になるまでに、両親が主イエス・キリス

トを信ずる信仰と祈ることと主の前に正しく歩むことを教えないならば、罪が両親の頭にとどまると教義と聖約に記録されている。教師は両親が子供の生活を形成するのを助けているのである。彼らの教えるすべてのことは、何と重大で責任の重いことであろう。

子供たちが、日曜学校や初等協会、相互発達協会、教会のセミナリーなどに出席し始める時から、心に良い印象を刻まれることは実に大切である。私が幼い頃に、第13ワード部日曜学校で教えてくれた教師への感謝の念は、永遠に消えないことであろう。自分が神のみ手に使われて人を正しく育てているという自覚から得られる報いは、世の富がいかにあろうともその配当は比べものにならないものである。私は若人を教えている正しい教師たちに、年月が過ぎて行く中で、神のみ手のうちに道具として使われて良い方向へと導いてくれた彼らに対する感謝が、数多い子供たちから配当

として寄せられると約束したい。

私はこれまでに幾度となく、少年時代、青年時代に日曜学校で教えて下さったハミルトン・G・パーク兄弟への感謝を言い表わしてきた。その時に受けたすばらしい教えと、生まれ故郷のスコットランドの2伝道地で福音を宣べ伝えた時に知った神の力や祝福とその経験を話してくれた、彼のすばらしい証に対して、私は感謝の言葉を禁じ得ないのである。

少年時代の私の心に良い影響を刻んでくれたハミルトン・G・パーク兄弟、ジョージ・ゴダード兄弟、ネルソン・エンピー監督、エドウィン・D・ウーリー監督、ミレン・アトウッド監督その他の人々にいつかまたお会いできる時を、私は大きな期待と喜びをもって待ち望むのである。私がこれまでもお世話になった他の多くの人々の名をここで列挙できたらと思う。私は良い影響を与えてくれた人々への感謝を永遠の世にわたっていただき続けるのである。

我々の与える印象は永続しないと考える人があるかもしれない。しかし、私は永続するとはっきり申しあげる。生ける神より靈感を受けて教師が子供たちに述べる証は、子供にとって忘れ難いものである。

少年時代の思い出をひろげる時にいつも感謝を新たにするのは、「エライザおばさん」への伝言をもってライオン・ハウス¹へ使い走りをした際に、すばらしいことをたくさん教えてくれた私の第2の母ともいうべきエライザ・R・スノー姉妹²のことである。彼女は少しの間でも必ず私をすわらせて、私に話してくれた。少女時代に母と住んでいたノーヴーでの経験や予言者ジョセフ・スミスの生活など、私にとって貴重な信仰を強める話を限りなく語ってくれたものである。私はそれによって自分の父母にふさわしい者になると決心したのである。

また、私は故エラスタス・スノー長老から受けたすばらしい教えを今でも鮮明に記憶している。彼はソルトレーク市から560キロも離れた所に住んでいたにもかかわらず、4月や10月の大会や特別な用でソルトレークを訪れた時には、必ずと言ってよいほど私の家を訪問して、私たち親子が元気か、私が義務をよく果たしているか、何をして、どういう友だちと交際しているかを尋ねてくれたのである。彼から受けたすばらしい証と父親のような忠告に対する感謝は、この世でもまたのちの世でも決して忘れることがないであろう。

教会の教師ひとりひとりには、人生の闘いの出発点にいる幼児や少年少女の魂に、神のみたまの導きによって影響を与える機会と能力とが備わっている。私は神があなたの働きを助けたもうよう、真心から祈るものである。神は必ずあなたを助けたもう。あなたにとって大切なのは、自分の仕事を愛し、生ける神のみたまに導かれて、その仕事を果たすことである。それこそ、イエス・キリストの教会とその他の教会とを分ける違いである。彼らは福音の書を持ち、勤勉に聖書を教え、聖書を深く信じ、その教えを我々同様実践しようと努めている。しかし、彼らは生ける神のみたまを持たないのである。それはなぜであろうか。彼らには神権の力がなく、我々と同じようには福音を受け入れていないからである。

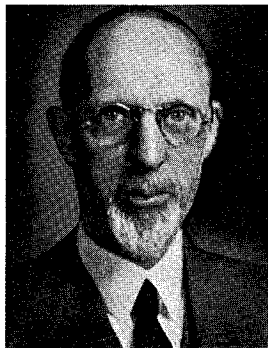
神がすべての教師を祝福したまい、彼らが福音の光と知識において、また福音の精神と力において成長し、教える人々にそれらを正しく伝える能力を受けるよう、願い、祈るものである。

1. ユタ州ソルトレーク市のブリガム・ヤングの家
2. スノー、エライザ・R. …教会の詩人、作家として著名である
1804—1887
3. スノー、エラスタス………ブリガム・ヤング時代の使徒
1818—1888

主のみこころをうかがえ

エラ, 1946年7月号

ジョージ・アルバート・スミス大管長



8代目大管長 1945—1951

私は、ある日街頭伝道が禁止されている町へ伝道に行こうとしている宣教師に対して、強い印象を受け、次のように語ったことを思い出す。

「忘れないで下さい。主のみこころをうかがうことを、あなたは願うのです。主のみこころをうかがうように道を開いて下さるよう、願いなさい。」

青年はその町へ行き、役所を訪れ、市長に面会を求めた。規則を変えてくれるよう請願しに行ったのである。

彼が市役所に着くと市長は町へ出て留守であった。そこで部屋を出てホールを見おろすと、ホールの端のドアに「警察部長室」という札がかかっているのが見えた。彼は一瞬ためらったが、何ものかが「主のみこころをうかがえ」と促しているのを感じて、その部屋へ行き、用件を伝えた。彼が話し終わると部長が言った。

「そうですか、あなたは町のどこで伝道をしたいのですか。」

彼は答えた、「私はあなたほどこの町をよく知りません。好ましくない所や交通の妨げになる所は望みません。私といっしょにその場所を選んで下さいますでしょうか。」

宣教師が警察部長に伝道をする場所を選んでくれと言うとは、何ということであろうか。

しかし部長は「そうしましょう。ごいっしょします」と返事したのである。

それから15分もしないうちに格好な街角が与えられて、戦争以前から行なわれたことのなかったイエス・キリストの福音伝道の許可がおりたのであった。(第

一次世界大戦ののちのことである)

私はこのような話をもうひとつ思い出す。ジョン・A・ウィットォー兄弟のこの話は何年か前に出版された本で、おそらく読んだ人もあろうが、それは彼がスカンジナビアにいた時に、とある小さな通りのめだたない店に何とはなく入ろうという気持ちになり、そこで系図記録をそっくり見つけ出したという話である。記録は店主にとっては何にもならず、非常な安値で買いつつたのだが、実は非常に貴重なスカンジナビア人の系図であった。もし彼が祈らず、探し求めず、みたまのうながしに従わなかったならば、それは得られなかったはずである。それらの特殊な記録は複写版もなく、他に入手手段も皆無であった。

主は我々にできないことを成し遂げる手段を持っておられて、我々に不可能なことをせよとは求められない。ニーファイは我々にそのことを教えている。主は道を備えずして我々に命じられはしないのである。

「そこで私ニーファイは、私の父に『私は主が命じたもうたことを行っていく。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわらないことを承知しているからである』と言った。」(I ニーファイ 3:7)

あなたに主からせよと言われたことがあり、どのようにしたらよいかわからない時には、ただ最善を尽くしなさい。行くべき方向へ行き、主を信頼して、主のみこころをうかがいなさい。そうすれば、主はあなたを決して見捨てたまわらない。

求 婚 時 代



第9代大管長
デビッド・O・マッケイ
1951—1970

求 婚時代にあっても、結婚したのちでも、我々は、非常に広範囲に環境をよりよいものとし、また支配することができる。そして各々が、自分の伴侶を賢明に神に祈り求めて選ぶことは、いかにも大切なことではないか。良き伴侶を選ぶか否かによって、我々の将来の生活の幸、不幸は決定される。それゆえ、社会の人々と交際し、生涯の伴侶として気の合う人を選ぶのは賢明なことである。もし交際をしている時、あなたが心をよせている人の性格が消極的であると思ったら、あなたは自分の判断力で自分自身の心を決めなさい。結婚すれば、悪い癖や消極的な性格はなくなるなどと愚かな考え方をしてはいけない。

では、我々が追い求むべき積極的な性格とはどんなものなのだろうか。本当の恋人は普通、正直であり、忠実であり、純潔であり、尊敬の念を持っている。あなたをだましている人、うそを言う人とは決して結婚してはいけない。いろいろ述べたが、結局、2人を本当に導くものは、最も神聖な、つまり愛なのである。

若い男女は、天与の熱情（私はそれを、神が与えたもう熱情と呼ぶが）に狩り立てられる時に、丁度その段階に入ったのである。この事実を認め、そのような熱情を持っているが、我々は、なぜそれらを満足させることができないのか」と言う若人たちがいる。そして、近代心理学者たちは、時には、それらの欲望を満たしても良いのではないかと、正当化

している。しかし、そんなことに惑わされてはならない。繰り返し言うが、あなたたち青年は肉体的な自然の欲求が現われる人生の一時期にいるが、同時に、神はその神聖な目的のために、理性や判断力を、あなたがたに与えてくださっていることを忘れてはならない。心の平安を守る理性と判断力によって導かれようではないか。あなたがたは、力と熱とを放ちながら強力に動くエンジンの横に立ったことがあるだろうか。このように正常に動いているエンジンを見る時、そこには均衡がみられる。もし均衡がとれていないならば、エンジン自体が破裂してしまうことだろう。エンジンが加熱するとこの均衡を保つために熱が放射され、エンジン全体が調節される。このように、あなたがたの内にある熱情に対しても理性と判断力により均衡が保てるのである。これらの均衡を保ちなさい。もしこの均衡が破れたらあなたがたの一生はめちゃくちゃになってしまうだろう。

結婚をロマンチックな酔興や利己的目的に応えるためのものとし、困難や誤解が生じた際には別れてしまうというような簡単な約束ごととみなすのは、邪悪で有害なことであり、特に、子供たちが親の離婚によって受ける苦痛は大きなものである。

幸福な結婚生活の種は、青年時代にまかれる。幸福は聖壇において始まるのではなく、求婚時代や青年時代にすでに始まっているのである。青年期にある時に自制し、単一の基準

と 結 婚

デビッド・O・マッケイ大管長

(エラ 1959年2月号より)



を備えた道徳律を守ることが、第1に1人前の男性のもととなり、第2には、美しい女性としての栄冠となり、第3には、幸福な家庭の土台となる。また、第4には、永久に子孫を絶やさないための要因となるのである。

求婚時代は終わった、いよいよ結婚式だと言って聖壇にやってくるカップルがあまりにも多いと思う。

すべての教会の会員たちは、結婚式を永遠の求婚時代の始まりとしようではないか。家庭を持つといういろいろな重荷が2人の肩にかかるが、だからこそ感謝の優しい言葉や丁寧な態度を甘い求婚時代のころよりも大切に、味わおうではないか。「ありがとう」「ごめんなさい」「どうぞ」等の言葉を毎日家庭の中で言わなければならないのは、結婚式のあとであり、試練にあう時なのである。なぜなら、それらの言葉により、2人は聖壇に導いてくれたあの愛を絶えず心に燃やし続けるのである。

次にあげる3つの大きな理想は、結婚式のあとにも幸福を持続させる助けとなるので、いつでも心に留めておきなさい。

第1、誠実であること。あなたがたは若いといえども、自分の優しい妻以外に、若い婦人へ気をとられていることは許されるものではないし、また、夫たる者は、他人の妻の注意を引こうと思う権利など全く持っていないのである。

妻として彼女の義務は夫と共にあり、家庭を築くことなの

である。あなたがたは偉大な誓約を誠実に守ることを、あの聖壇の前で誓ったのである。

第2、自制すること。ささいな事に腹を立て、かんしゃくを起こして、金切り声をあげ、他人の心を傷つけてしまう。家庭の幸福と平和を守る最も偉大な徳性は、会話において舌を制することではないかと思う。もし、気持ちを傷つけられたり、気分を害するようなものを目にとめた時、あなたの心に激しい言葉がうかんでも、言わずにがまんしなさい。数分後、あんな激しい言葉を口にしないでよかった、衝動的な行ないをしなくてよかったと、うれしくなるだろう。そして、その良い行為の結果、家庭に愛と平和がもたらされるのである。

第3、ほんの単純な徳行である礼儀。つまり子供は両親に対する礼儀を守り、両親は子供に対する礼儀を守る。家庭内に洗練された上品な雰囲気をつくり出すには、礼儀がその基本となるのである。誠実さ、自制、礼儀、この3つをいつも心に留めておきなさい。

15年、30年、50年……そして永遠に、あなたが求婚した時のように、互いに礼儀を守りなさい。そうすれば、幸福な家庭は得られる。私は、家庭においてこそ最大の幸福が与えられるものと確信している。だから、家庭を天国の一部と考えることもできよう。全く天国とは理想的な家庭の延長であると私は考えている。

わが主キリスト

ジェームズ・E・タルメージ長老

エラ. 1932年12月号

至 高者、人として完成され、完全な神としてとどまっておられ、御父の権能のもとに天地を創造された御方。

永遠の存在者にして、永遠より永遠にある御方。永遠の過去から未来に渡って「われあり」¹であられる、エホバ。

御父が、選びし者、生み給える御子、霊の長子²、肉体における神の独子と呼びたもうた御方。

初めにあり、神と共にあり、神であり、肉体となり、人々のうちに宿った言³。

死すべき体を持ち地上を歩んだ人々の長。

ベツレヘムのみどり子⁴、ナザレの少年⁵、悲しみを知っていた悲しみの人⁶。

我々の長兄。

卓越した教師。

罪人として責められ、人間として死に、神として勝利を得てよみがえられた御方。

死よりの人類の贖い主、罪の結果よりの救い主、永遠の生命の源。

墓から復活した者としてよみがえった最初の御方⁷。

死と地獄の征服者。

昇って行かれたと同じ有様で来られ⁸、聖徒たちのうちにあって地を治めたもう御方⁹。

「われ勝ちぬ、われひとりにてさかぶねを踏みり。……然る後彼は栄冠を受け、その有ちたもう能力の御座につきて限りなくいつまでもすべ治めたまわん」(教義と聖約76:107—8)と言われ、贖われたみ使たちと共に汚れない地を御父に引き渡したもう御方。

父なる神はイエス・キリストが御子であることを繰り返し宣言され、またイエスは、少年時代より贖いの聖なる死をとげるまでの間ずっと人の子として御自身の高い地位を言明しておられた。古代近代の予言者や使徒たち、また主を喜んで受け入れる「一般の人々」は、イエスの神性を敬けんな態度で表明している。天使たちは力と神性のゆえにそのみ名をほめたたえる歌を歌うが、悪魔たちは、おそれをなして悲鳴をあげる。

我々は、イエス・キリストを肉においても霊においても永遠の御父の真の子として、ほめたたえる。イエスは人として人々の中に生まれ、次の点からわかるように、まったく比類ない御方であった。すなわち、死ななくてはならない母マリ

アからは死すべき特質を受けつぎ、不死不滅の御父からは生得権として神の力を受けついでおられたのである。

したがって、イエスは、死を味わうことができ死なれた。また、死に打ち勝つ力を持っておられ、自ら死を望まれるまで、死をのぼされた。イエスは死すべき御方であられたにもかかわらずこう言われた。「父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。だれかが、わたしからそれを取り去るのではない。わたしが自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、またそれを受ける力もある。……」(ヨハネ10:17—18)

イエスは、人類の贖い主、救い主として受け入れられ、予任された御方であり、罪が全くなく潔白な御方であった。

イエスは、アブラハム、イサク、ヤコブの神、旧約のエホバ、新約のキリストである。だれも御子によらずして天父のみもとに帰ることはできない。イエス・キリストのみ名は、人の子たちに救いがもたらされる天下に唯一のみ名である。(使徒4:12参照)

イエスは、現代のこの神権時代に、予言者たちに御自身を現わしたまい、人と人が語るように、予言者たちと語られた。

イエスが、永遠の御父と同じ形をしておられることは知られている。すなわち、人は御父の形をしている。時満ちたるこの神権時代に、御父と御子は現われたまい語られたのである。

また、イエス・キリストは、職務を務めるように委任された人を通して、この末の日に地上に主の教会を再建したまい、主のみ名を授けて末日聖徒イエス・キリスト教会と呼ばせたもうた。

主イエスは、古代の教会と同様に、使徒、祝福師、大祭司七十人、長老、監督、祭司、教師、執事をたてられ、主の教会を治めておられる。

また、古代においてもそうであったように、イエス・キリストを信じる信仰、悔い改め、水に沈められるバプテスマ、権能を持つ者の手によるみたまのバプテスマを人類に呼びかけておられる。

イエスは、啓示を受ける賜、予言の賜、異言の賜、またそれらを解釈する賜などにみられる聖霊の恵みを通して、また



ジェームズ・E・タルメージ長老
十二使徒評議員会会員（1911—1933）
「信仰箇条の研究」「キリスト・イエス」
の著者



霊夢や示現、癒し、人が奇跡とよぶいろいろな賜により、力を現わしたもう。（Ⅰコリント12：4—10）

イエスを通して、贖いは全うされ、すべての人々に救いをもたらされる。救いは贖いを含み、贖いに勝る。これは、永遠の父なる神が立案され、イエス・キリストを通じて人に与えられた計画である。それによって各人の墮落し悲しむべき罪は贖われるのである。それは憎むべき罪の病が癒される手段である。贖いすなわち死よりの救済は、全人類にその効用が及ぶのである。救いは個人個人が得るものであり、イエス・キリストによってのみ達成された贖罪に基づく福音の律法と儀式に従うことにより、得られるのである。

贖い主であり、救い主であるイエスは、「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」御父のみ業と、栄光を全うするのに必要欠くべからざる御方である。（モーセ1：39）

いつか、どこかで、主の知識はすべての人々に行きわたり

救いをもたらし、各々の罪を悟らせる。その時、すべての人々はひざまずき、イエスは生ける神の子キリストであると告白するであろう。（教義と聖約88：104 モーサヤ27：31参照）

脚注

1. 出エジプト3：14：参照
2. 教義と聖約93：11, 21参照
3. ヨハネ1：1, 14参照
4. マタイ2：1参照
5. マタイ2：23参照
6. イザヤ53：3参照
7. Ⅰコリント15：20参照
8. 使徒1：11参照
9. 教義と聖約76：63参照

ニュージーランドに 起こった奇跡

ローリン・F・フィールライト
(ブリガム・ヤング大学の美術、報道学部長)

インストラクター 1966年6月号

二 ユー・カウリー長老が神権により盲の赤ん坊を祝福し、目を見るようにした話を聞き、その癒しの業がどのように行なわれたのかと驚いていた。ラハ・ウィニーラというのが、その赤ん坊の名前であった。

数年前、私も初めてこの癒しの業のことをある本で読んだのであるが、このすばらしい業が、簡単に、しかもいつもと何ら変らぬやり方でなされたのを知り、驚いたのである。

1953年、ブリガム・ヤング大学の学生たちを前にして、カウリー長老は、こう言った。「私はすばらしい経験をいくつかしました。

過去において、主が私をとおして働かれない時が幾度かありました。しかし、主が私をとおして働かれた時、幾度も私は奇跡的な業をしています。

いや、奇跡という表現をすべきではありません。なぜなら、聖霊により靈感を与えられる神権者にとっては、何ら驚くべきことではないのです。愛する学生のみなさん、私はけさここであなたたちに、神様は神権を通して働くことができ、まさに働いておられると証します。私は、そのことをよく知っております。私は、非常に数多くの経験をしました。ですからこれらのことに関しては、何の疑問もなくちゅうちょすることなくはっきり証します。』

そして、カウリー長老は、癒しの業やその他聖霊の顕現について少し述べ、またあの盲の赤ん坊を癒した話をした。

私はここで、生まれつき盲であった生後9カ月の赤ん坊の話をしようと思う。その赤ん坊の父親がある日曜日、彼をだいて私のところへきてこう言った。「カウリー兄弟、私たちの子供はまだ祝福されていません。どうかこの子をあなたの手で祝福してください」

私は、「なぜもっと早く祝福しなかったのですか」とたずねた。すると父親は「時間的な余裕がなかったのです」と言った。

これが土着民のやり方である。私はそれが好きなのだが。彼らは何かことをするのにあくせくしない。なぜ、祝福を受けて生活にとり入れないのか。「わかりました。その子に何という名前をつけたのですか」と私が聞くと父親はその子の名前を言い、さらにこのように言って、まさに命名しようとしている私を大変驚かせた。「私の子供は生まれつき目が見えないのです。命名の儀式を施す時、目を開けて下さい。」その言葉に私は動揺しましたが、私は自分にこう言いかけました。「できないことがあろうか。キリストは昇天される時、奇跡を現わすであろう、と弟子たちにお言いになったと」。私は父親の信仰を信じていた。そこで、私はその赤ん坊に命名した後、この赤ん坊の目を開かせた。この子は今大体12歳位の少年に成長している。この前そこへ行った時、私はこの少年について尋ねるのがこわかった。私はこの子がまた、盲になってしまったものと思い込んでいた。私の信仰は時々このようにも働くのである。私はそこで支部長にこの少年について尋ねてみた。すると支部長は

「カウリー兄弟、最も残念なことはあの子の目を開けるよう祝福を与えたことでした。」あの子はこの近辺で最もわんぱくでいつも悪ふざけばかりしているのです」と言った。私はいたずらばかりしているこの子についてぞっとさせられた。

……神はこれらのすべての力を支配しておられる。あなたや私は、もしそれが神のみ心であるならば、手を差し伸べてそれを求めることができる。また私たちは私の目的のもとにこれらの力をもつことができるのである。私は主が生きたもうことを知っている。私はイエスがキリストであり、ジョセフ・スミスは神の予言者であったことを証する。そしてもし人類の歴史に一つの奇跡があったとするなら、その奇跡は地上において現在のこの素晴らしい時点にまで成長したこの教会そのものである³。

最近、私は日曜学校の中央管理会の一員としてニュージーランドのステーク部を訪問するように指示をうけた。そこにいる間に私はカウリー長老の祝福により両眼を癒やしてもらった少年について聞いた。私はその少年のお姉さんがハミルトンににいるということを聞き電話をかけた。

「ニュージーランドに、カウリー長老から祝福をうけて目が見えるようになったあなたの弟さんがいますか。」と私は尋ねた。「ええ、いますとも。弟は今、ウェリントンに住んでいます。あなたがそのステーク部に行かれる時、たぶん弟はその集会に出席すると思います。彼は教会でとても活発にやっています。」と彼女は言った。

私はラハというその少年がとても活発に教会で働いているのをこの目で確かに見た。子供の頃のわんぱくはあとかたもなく今では立派な大人に成長するまでになった。彼は自分に起こった癒やしの奇跡について、それを見た聖徒たちの証を聞いて初めて知ったと言った。

「私は14歳になるまで、そのことを別に気にかけませんでした。」と彼は言い、たださりげなく、卒直にこう言ったのである。「私は教会に対して証を持っています。そしてもっと知りたいと思っています。」

この若者は神権の力を証する毎日を送っている。1949年の一般大会でこの経験について語った時、12使徒の一員であったカウリー長老は、彼がこの子供の目が見えるように祝福してくれるよう頼まれた時の自分の気持について語った。

私は圧倒されたのでした。私は戸惑ったのですが、あのポリネシア人ラハの父親の内なるものを私は知ったのです。彼はただ幼児のように信じていた。物質や人の知識によって何ら濁らされていない純粋な信仰、ただ神のみに信頼を置き、神が御子イエス・キリストをとおして果たされる将来を信じていたのであった。私はその子に命名をし、その目を祝福するために必要な勇気をついに奮い起こしたのだった⁴。

カウリー長老のこれらの言葉は、私がニュージーランドを再び訪問して、「私は教会に対して証を持っています。そしてもっと知りたいと思っています。」と言ったその少年の澄んだ瞳のラハ・ウィニーラが私の集会に出席した時に、私の心に深い感動をもって刻み込まれたのでした。

1. マシュー・カウリー (1897—1953) 十二使徒評議員会会員
2. マシュー・カウリー、マシュー・カウリーの説教
3. 同書P:247—248
4. 同書P.5

予言者となった

詩人

ウェンデル・J・アシュトン

チルドレンズ・フレンド 1953年3月号

ミルンソープは、イギリスの北西にある小さななか町で、スコットランドとの国境からそう遠くない所にあります。この町は湖のあるところとして有名で、すんだ静かな湖や木の植えてある川岸があり、とても美しい所です。空気はきれいにすんでいて、町のまわりに石がきがあり、丘はみどり色です。

また、この地方は、多くの詩人を生んだことでも知られています。あなたも、ワーズワース、コールリッジ、サウジーなどの名前は知っているでしょう。

さて、ここに1808年11月1日もうひとりの詩人が生まれました。その人の名前は、ジョン・テイラーです。彼は詩人以上の人になりました。ジョンは主の予言者となり、末日聖徒イエス・キリスト教会の3番目の大管長となったのです。

ジョンのおとうさんの名前はジョン・テイラー、おかあさんの名前はアン・テイラーといい、10人の子供たちがいました。ジョンは少年時代、この平和な湖の町で、ほし草畑に出て、いっしょうけん命働きました。14歳になったとき、両親はジョンをおけ屋にしようと決めました。おけ屋の仕事は、たるを作ったり、しゅうりすることなのです。こうして、ジョンは、リバプールにある工場へ働きに出ました。

でも、彼はその仕事に失敗し、家へ帰って来たのです。そして、こんどは、商売を学ぶつもりで、湖の町ペンリスへ行き、ろくろ細工の仕事をしました。そこで彼は約5年間、ろくろ細工にはげみました。

ジョンが22歳のとき、彼の両親、兄弟、姉妹たちはイギリスからカナダへ行きました。ジョンは、生きている兄弟のうちでいちばん年上だったので、ひとりだけ残って、いろいろとあとかたづけをしました。

ジョンがトロントにいる家族といっしょに暮らすようになったのは、それから2年後でした。彼はそこでろくろ細工の店を開きました。

トロントで、この若いイギリス人ジョンは、メソジスト教会の活発な会員になり、クラスの教師、せっきょう者として働きました。その集会に出席したとき、彼はレオノラ・キャンノンという名前の上品で、利こうな少女と出会いました。彼女は「人の島」と呼ばれる所に住んでおり、そのおとうさんは、その指導者ジョージ・キャンノンといいました。この島は、アイルランド海にあり、ミルンソープのちょうど西にあたりました。ジョンは彼女と結婚したのです。

さて、若いジョンは、メソジスト教会の教えに心から満足していたわけではありません。彼は友だち数人と小さなグループをつくり真理を追い求めました。

彼らは、イエス・キリストの本当の福音を求めました。週に2回、彼らは聖書を使って集会を開きました。

そのうちに、若いモルモンの宣教師が、トロントから80キロメートルほど離れたハミルトンの町へやって来ました。かれは、いなかから出てきた農夫といった感じの人で、パーレイ・P・プラットという名前の人でした。パーレイはこの町へ初めて来たうえに、お金を少しも持っていませんでした。

この宣教師は、森の中で人目につかない場所を選んでひざまずいて祈りました。主が助けてくださるようお願いしたのです。

さて、祈りおわってハミルトンの町へもどる道で、パーレイはひとりの男の人に会いました。その人はパーレイに名前と行く先をたずねました。プラット長老は、トロントの町へ行きたいのですと答えました。すると、その人は、プラット長老に10ドルと、ジョン・テイラーにあてた紹介状をくれました。

プラット長老はトロントへ着くと、ジョン・テイラーの家をさがしました。テイラー夫人はかれを親切にもてなし、ジョンを店まで呼びに行きました。

こうして、ジョンたちの聖書グループは、プラット長老にめぐり会うことができました。ジョン・テイラーとレオノラ・テイラーは一生懸命勉強したあとで、プラット長老が自分たちの求めている本当の福音を持っていると思いました。そしてみんなは、バプテスマを受けたのです。そのとき、ジョン・テイラーは27歳でした。それから、イギリスの詩人の国で生まれた若いころ細工師ジョンは、新しい生活をするようになったのです。そしてかれの霊は高められたのです。

バプテスマを受けて数週間で、ジョンは長老になりました。そしてそのふたりはトロントの近くで回復された福音を人々に伝えました。数か月後プラット長老と別れましたが、その時ジョン・テイラーは、カナダの北の方の教会のすべての支部をせわすることになりました。

その後、ジョンは予言者ジョセフ・スミスと会うことがで

きました。そして、ふたりはよい友だちとなったのです。やがてジョンがバプテスマを受けてから2年たち、かれは十二使徒になりました。

それから1年後ジョン・テイラーは妻と子供たちを連れてモントローズにある丸太でできたみずばらしい古い家に移り住みました。モントローズの町にはノーヴーから続くミシシッピー川が流れていました。その時ノーヴーの町は、ミズーリを追われた聖徒たちが新しい家をたてていました。当時ジョン・テイラーの家族は病気にかかっていた。そして、ジョンも病気でした。しかし、かれは伝道のためにイギリスへ行くようにという教会の召しにこたえたのでした。このころすでにジョンは、聖徒たちの間で、「正義の闘士」として知られていました。ジョンはウィルフォード・ウッドラフといっしょに伝道しましたが、ふたりとも一銭のお金も持っていないで途中、パーレイ・P・プラットとヒーバー・C・キンボールのふたりの使徒に出会いました。プラット長老が彼らにさいふを渡し、「私の持っているものはこれだけです」と言うと、キンボール長老は、「私は1ドルありますからそのさいふに入れてあげます」と言いました。

ニューヨークまで旅をした7週間に、テイラー長老は4度も重い病気になりました。しかし、かれは行く町で、あるいは、道ばたで福音を説くことをやめませんでした。時には、足がとても弱くなっていたので、立っておれずすわって福音を説きました。でも、とうとうウッドラフ長老とテイラー長老のふたりは、真冬のきびしい寒さに耐え、小さな船で大西洋を渡り、イギリスへ着きました。そしてテイラー長老は、リバプールへ行きました。かれは少年のとき、どうしたらおけ屋になれるだろうかとこの町で学んだものでした。ここでも多くの人々がテイラー長老の説教に耳をかたむけ、イエス・キリストの教会に加わりました。

ジョン・テイラーと他にふたりの仲間、福音を持ってリバプールからアイルランドへ向けて出発しました。そして彼らはニューリーでアイルランドでの仕事、つまり伝道をはじめました。そのニューリーの町は北部アイルランドにあり、一方はみどりの美しい丘に囲まれ、もう一方は海に面していて、とてもすばらしい所でした。彼らはホールを借り、人を使って、夜集会があることを町中に知らせました。およそ

700人ほどの人が聞きにきました。そこでジョン・テイラーは説教をしました。

テイラー長老ともうひとり、ニューリーから、他の町へ行きました。

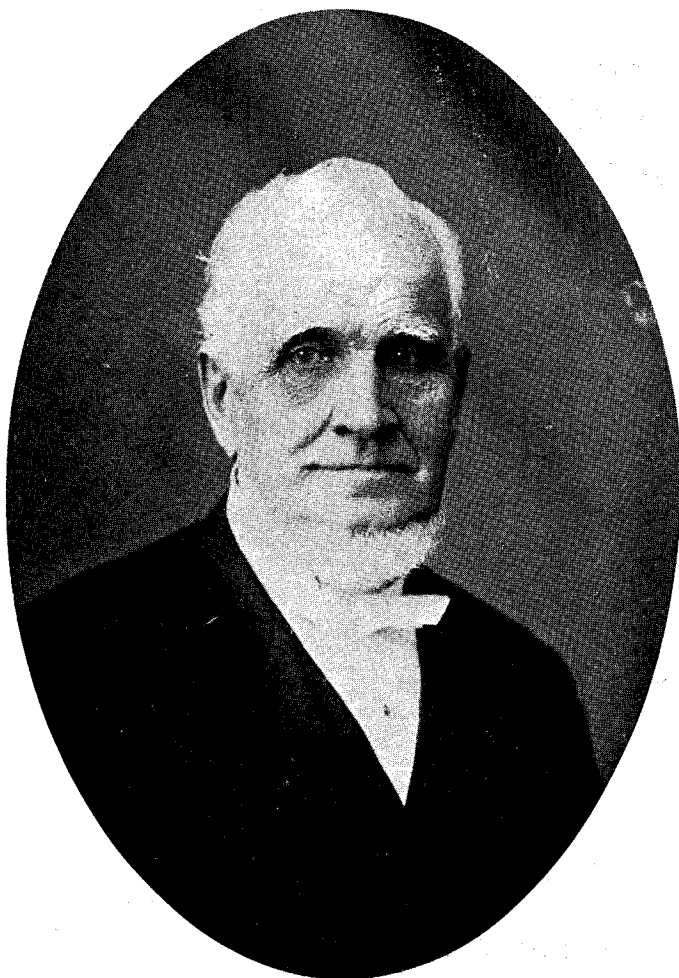
そのうちにトーマス・テイトという名前の人が旅に加わりました。またある所では、アイルランドの二輪馬車に乗り旅を続けました。それは、横やうしろのほうにも乗れる馬車でした。それから、あちらこちらにある白い小屋にとまり、美しい緑の国を伝道しながら旅をしました。

彼らはリスボンの町へ向かって歩いていましたが、そのとちゅうテイラー長老はトーマス・テイルに福音をときました。やがて、一行が丘の頂上に着いた時、彼らはラフ・ブリックランドという美しい湖を見おろすことができました。その時トーマス・テイルがうれしそうにさげんだのです。「ここに水があります。私がバプテスマを受けるのに、何のさしつかえがありますか」と、そこでジョン・テイラーは、トーマスといっしょに湖へ入り、彼にバプテスマをほどこしました。このバプテスマは教会が回復されてからアイルランドで行なわれた初めてのものであると言われています。

ジョン・テイラーは、その後も教会のためにつくし、フランス、ドイツ、ノーヴー、ニューヨーク市、そしてふたたびイギリスと、多くの国を伝道のためにまわりました。かれは詩もつくりました。そのなかには今この教会で歌われているものもあります。

ジョン・テイラーの人生に起こったでき事のうち、最もよく知られているものは何といっても、1844年の夏、カーセージの牢獄で起こったあの事件でしょう。その時かれは、ジョセフ・スミス、ジョセフの兄ハイラム、ウィラード・リチャードといっしょにいました。テイラー長老は、その牢獄の2階でジョセフ・スミスたちに頼まれ、「悩める旅人」を歌いました。ところが、歌い終わると、顔に絵の具を塗った暴徒が、牢獄になだれ込んで来たのです。予言者とその兄は銃でうたれて死にました。ジョン・テイラーが窓からとびおりようとしたとき、たまが飛んできて、1つはチョッキのポケットに入れてあった時計にあたり、他の4つは足にあたったので、かれはうしろに放り出されてしまいました。

でも、ジョン・テイラーは死にませんでした。かれは1877年ブリガム・ヤング大管長の死んだ後、そのあとをついで教会の指導者となりました。



ジョン・テイラー

末日聖徒イエス・キリスト教会

第三代大管長

大管長ジョン・テイラーは、白髪で、美しいすんだ目の予言者でした。またかれは、ほんとうに威厳があり、誠実で、勇気があり、そして親切でした。ある人はジョン・テイラーのことを「イギリスの紳士」と言いましたが、そのとおりだと思います。大管長としてかれは神殿を建て、伝道活動をさかんにしました。

やがて、ジョン・テイラー大管長は、ユタ州ケーズビルで1887年7月25日に亡くなりました。その時そこで、78年間の力強い生きた詩は終わったのです。かれの生涯はかれの詩が生まれたあの湖の町のようにほんとうに美しいものでした。

ジョン・テイラー大管長の好きな言葉

「神の王国か、それとも無か」



すばらしい朝

ルーシー・C・リーディング

チルドレンズ・フレンド 1961年9月号

そのとき、トーマス・マクニールの家の人たちは、数週間というもののじゅうぶんな食事をしていませんでした。彼らは、何か月もの間、ただ、忠実な年老いた牛のミルクと、赤く色づいた野性の果実ばかり食べて、とても貧しい暮らしをしていました。さて、1859年10月も終わろうとしているところ、トーマスたち開拓者の一行は、冬がくる前にユタ州に着くことができるかどうかと心配していました。おとなたちが谷間に家を建てようと計画している時に、子供たちは、おなかいっぱいになるまで食べられるパンや肉や、その他いろいろなごちそうのことを考えていました。

疲れた一行が、ユタ州オグデン市の近くに到着し、野営の用意をした時にはもうあたりは真暗でした。しかし床に入る前に、人々はお祈りするためにひざまずき、きょう無事に到着できたことを感謝し、あす食物を手に入れることができるようにと神様にお願いしました。開拓者の一行のうち、半数くらいは飢死寸前で病気にかかっていました。

次の朝早く、マクニールの家のおとうさんはわずかの食物でも手に入れたと思い、そのためのお金を得るため仕事を見つけようとして、オグデン市へ出かけte行きました。でもお昼になる前、小さな子供たちが、おなかですいたと言って泣き出したのです。マクニールの家のおかあさんは、12歳ほどになるマーガレットに、原っぱを横切ったところにある小さな家へ行って戸の近くに山のように積みあげているカボチャを少し分けてくれるようにたのんできて欲しいと言いました。マーガレットは、乾いた草の上をはだしの足を引きずるようにして歩きました。そして、彼女は、助けが与えられますようにと、くり返してお祈りしました。

さて彼女がドアをノックするかしないうちに、優しい声で「おはいりなさい。どうぞおはいりなさい。私はけさからずっとあなたを待っていたのですよ」と言う声が聞こえたのです。マーガレットが中へ入ると、焼きたてのパンのかおりが部屋に満ちており、老婦人が、いそがしそうに大きなかごに食べ物をもっていました。婦人は言いました。「はい、この暖かいパンを持って帰りなさい。そうすれば私は休むことができます。けさ何かが私に「食べ物を余分に用意しなさい」と言ったのです。私はあなたが来たので、その意味がわかりました。

アルマとなることの大切さ

あの有名な決戦で捕えられたので
誤った側に味方していたのか
エラ、若人のページ、1966年1月号

ロバート・スペンサー

教

会の管理者であり大祭司であった父親と同じ名前であるところから「息子の」アルマとして知られているアルマは、モーサヤ王の4人の息子たちと共にひそかに歩き回り、「よく人にへつらい」「言葉が多く」教会を打ち壊そうと望んでいた。記録には、かれらは「罪人の中でも最も卑劣な者」(モーサヤ28:4)、またアルマは「非常に罪深い男で邪神を信じ」(モーサヤ27:8)ていたと記されている。

そうこうしているうちに、アルマは奇跡的な経験をした。一人の天使が彼に現われ、アルマの父アルマの断食と固い信仰と祈りが答えられたことを説明した。天使はアルマに「たとえ自らの心によって神にすてられるとも、主の業を打ち壊そうと努力してはならない」と告げた。

三日三晩、アルマは地獄の激しい苦痛を受けた。彼はその時の経験を思い出して、数年後に息子のヒラマンに語っている。

「……しかし私がこのように責め苦しめられ、すでに犯した多くの罪を思い起こして非常に良心に責められていたとき、神の子であるイエス・キリストと言うお方が、世の人の罪を贖うためにこの世へ来りたもうと言うことを、私の父が前に人民に予言をしたことを思い出した。そしてこれを思い出したとき、私は心の中で『神の御子イエスよ、永遠の死の鎖にしばられて今苦汁を飲まされている私を憐みたまえ』と歎願した。このように心の中で願うと、ごらん、私はもう少しも苦痛を覚えず、再び自分の罪を思い出して苦しむこともなかった。ああ、この時私の感じた喜びと、私が見た驚くべき光とはいかにも大きかった。まことに、私はこの時前に感じた苦痛にひとしいほどの喜びに満ちたのである。わが子よお前に言うが私がその時に感じたほどの劇烈な苦痛がこの世にまたあろうか。またその時に感じたほどの甚しく美しい喜び

がこの世にまたあろうか。」(アルマ36:17-21)

父の信仰と祈りが息子を改宗させる霊的な力を呼び起こしたのであった。

そして息子のアルマに——何が起こったのであろうか。彼は父に継いで教会の管理者となった。また彼はその民を治める最高の位に選ばれ大判事となったのである。

この息子のアルマから、私たちは神の目からみて、真の悔い改めの結果は次のようなものではないということを学ぶ。すなわち、

——板に釘を打ち込み、引きぬくことができるが、釘の穴をふさぐことはできない。

——翼の折れた鳥はいまや回復してはいるが再び以前のようには高くは飛べない。

——脱線した列車は、線路に再びのせられても、目的地に到着するまでの遠距離に行くことは決してできない。

神は私たちに予言者をとおして、真の悔い改めを許し、つまり完全な許しをもたらすと語っておられる。

アルマは悔い改め、神は彼を許したもうた。彼は主に油そそがれた第一の大祭司となった。彼は従順を学び、一生涯全力を尽くしてそれを実行した。

これこそが、アルマとなることの重要性である。

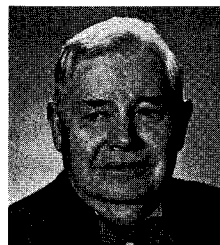
若人とは

J・ルーベン・クラーク・Jr.

エラ, 1937年8月号

J・ルーベン・クラーク・Jr. 副管長は

以前メキシコ駐在大使を務め、1933年から61年にかけて大管長会の一員であった



きょう私は、あなた方の前に立ちふさがっている多くの問題の中からほんの少しだけふれてみたいと思う。御忠告しておくが、それはごくありふれていて明白なことであり、あなた方が以前よく耳にしたことである。しかしそれらについてもう一度聞くのも良いことであろうと思われる。それは、あなた方今日の若人に関連あることである。

また若人について話すに当たり、私はいわゆる当世の若人の運動の下に横たわる思想のいくつかを話してみたいと思う。それは、今日ここにいらっしゃるあなた方がそれらの思想に影響されていると考えられる根拠があるからではなく、むしろこの教会の精神とそこで教えていることが皆さんに真の人生観、人生の意味、高い目的、究極において神のごとくなるという運命を知らしめてくれることをはっきりとさせる必要があるからである。しかしながら、あなた方が将来においてそれらの思想の影響を受ける時のために話しておきたいと思う。過去の人生経験とまた多少の幻滅感を持ちながらも、日々強められて行く信仰に根ざした老人のもつ冷静さをもって、そして福音のすばらしさとその栄光、さらに従順であれば私たちを救いと昇栄に導いてくれる福音の原則を考えながらこの話を進めて行くつもりである。

人生70年の坂を越えたとはいえ、私たちはまだ大学の卒業証書をもった当時の感激をぼんやりとおぼえている。年は取っていても、かなり昔の青春時代に得意だったこと、あるいは話したことなどを思い出すことがある。今では少し気恥かしい思いがする。というのは、年のせいで目はかすみ、想像力にはぶくなっていても、現実はかつて得意に思ったり話したりしていたよううすっぺらな中味とは似ても似つかないということがわかるからである。そして当時そんなに大胆になっていた事柄は、夢や幻のようにかすかなこだまとなって返ってくるにすぎない。

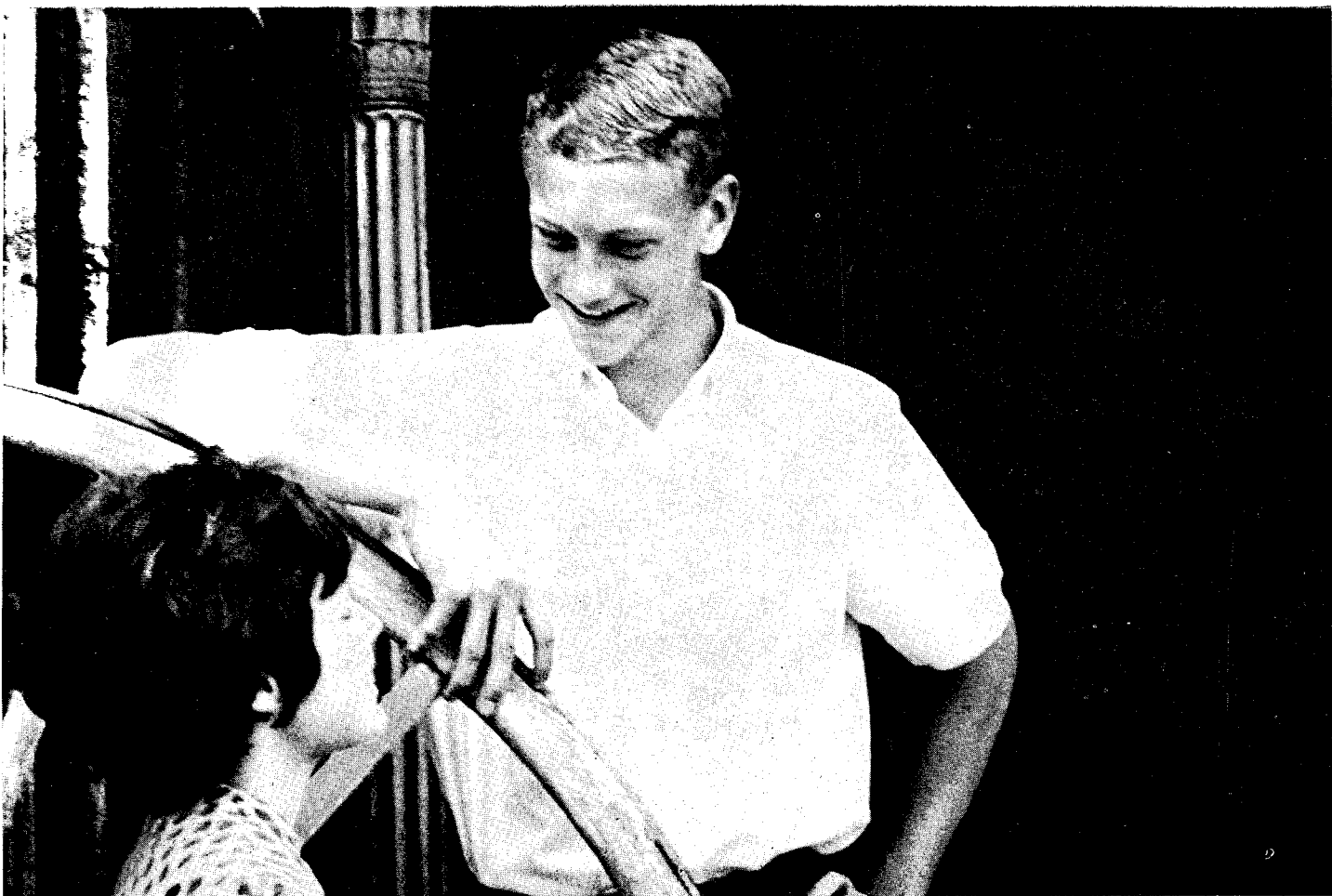
そんな過ぎし昔に、ある者は偉大な軍人を、またある者はマキャベリ¹をしのぐ有名な外交官を目指して学校を巣立っていった。法律家や政治家、演説家、画家、劇作家、あるいは閣僚や大統領を志す者もいた。血湧き肉躍り、やろうとする意志に燃えていた。希望は天に届くかのように高く志はうなる獅子にも似ていた。勝利が腕を広げて招き、名声が笑みをたたえて待っていた。なんと輝きに満ちた時代、なんとすばらしい級友たちだったろうか。

私たちは有頂点になっていた。世の中を自分たちのような明るく活気あふれた若人の基準に合わせることを夢みていた。しかし若き日は世と共に私たちから過ぎ去り行

き、その歩みは乱れた。

この時になって初めて明白なことがらを学んだのである。そしてそれは当時の私たちにはよく理解できなかったことである。あなた方にはすでにおわりのことと思う。すなわち、昼と夜があって、1日は24時間、1年は365日であり、同じ年に留まることはできないことを知ったのである。しかも年々老いて行き（私たちの半数がこのことを知った）1年には四季があって規則正しくめぐってくることを。また正しい者にも正しくない者にも雨が降り²、太陽は同じように照ることを。寒い時にはすべての人が寒く、暑さに対しても同様であることを学んだ。春は種まき、秋は収穫の季節、すなわち春に種まきや植え付けをしなかったら秋には収穫がないことを知った。長年の経験から豊作の次には不作がやってくることを知った。地上とそこに住む人々は法と秩序で治められており、決して気まぐれや私たちの望みのままにはならないことを、また大多数の人々は私たちの発言や意見に関心を示さないことも知った。そして、どんなに話したり考えたりしても自然はそれを理解し得ないのである。

私たちがこれらのことを学んだのは、やすらかな眠りから覚める如くに夢が破れて自覚へと移って行くようなものであった。私たちの目は少しずつ開かれ、見知らぬ世



界すなわち現実の世界にまばたきをしていた。

それと共に完全な男らしさと女らしさを身につける時がやってきた。生計をたてなければならないという気持、家族に対する責任感が芽生えてきた。欲、偽り、不正、不正直を知り、人生の矛盾が激しく押し寄せの中で自分と愛する者たちが生きていくために戦わなければならなかった。私たちは不正を働いたり、人を欺くこと、ましてや大いなる自然の律法や霊的な律法に背くことはできないと悟った。律法は常に罰を伴うことを知ったのである。

こういう時に人は皆幻滅を感じ、ある人々にとっては希望を失って失意の生活そのものになってしまう。しかし困難がうず高く積まれるに従って、絶えざる信仰を持って義のうちに生活している人々には永遠の生命への希望が与えられ、神が生きたもうことを知るのである。また福音の真理と救いの原則、神と同胞への愛を知り、神の心と目的に対する変わらざる信頼を持つようになる。こうして中年の成熟期へと移って行く。

私たちが知識を増し経験を積むことは、神が与えたもう最高に高価なる賜である知

恵を貯えていることになる。こうして長いことかかって達成した成熟は、その歩みを早めて行く。やがて円熟の期がやってくるが、時として熟し過ぎてしまうことがある。ついに現在あなた方が目にしている私たちのようになる。あなた方の両親、あるいは祖父母のように。良きにつけ悪きにつけ、私たちはあなた方の中に自分自身を見るのである。以上述べてきたことは私たちのみならず、祖父母たちがそのまた以前に経験してきたことである。これらの経験から、あなた方もまったく同じ道を歩んでいると申しあげたい。

頭を振っている人がいるようだが、次のことを考えていただきたい。長年にわたる人間の経験から、各世代がその時間と努力と人生をどのように使うかがわかるのである。時として政治的、経済的、あるいは道徳的な問題が人類の間に起こって予測がはずれ、病弊や伝染病がまん延して、数字の方程式並みに寿命を言い当てる死亡率の法則が成り立たないように見えることがある。しかし、どの場合も時間がすべてを元通りにし、偉大な人間生活はまた元のようにになる。たとえ人類が無数に存在し、種々雑多であろうとも、宇宙にあって人間ほど

確かなものはない。若人もこの原則が変わらないと思っていることであろう。

今日の若人の運動について考えている人の意見を知る機会があれば、私はその人が頭の中で細かく描いていることを簡単に読み取るであろう。私の意見に対して現代は違って古い規則はすでになくなっているとか、古い律法は変わってしまい。新しい世界が、新しい希望、思想、標準、抱負、業績、調整と共に生まれているという反対意見があることもわかるであろう。世界は若人のものであって、長いこと引き延ばされてきたゆずりの時に入るべきだという意見もあるだろう。

人生をわずかの土地を手に入れるためにあくせく働き苦労している私たちにとってこの地球を所有するという考えは魅力である。私たちが若い頃に描いた夢はあなた方のように大胆ではっきりとしたものではなかった。このことから、幾多の失意に訓練されてきた私の年老いた心に次の2つの質問が起こる。若人とはだれのことなのか。きょうここに出席したあなた方のような人たちのことだろうか。それとも1年後、10年後にここに出席する人のことだろうか。今1つの質問は、若人とはいつをさすのか

ということである。15才から18才を言うのか、それとも19~20才、21~24才、25~30才、あるいは15才から30才まで全部をさすのだろうか。もし15才なら、14才はなぜ若人ではないのか。そして赤ん坊はどうなのか。もし30才なら、31才はなぜ当てはまらないのか。また逆のぼって1880年代、1890年代の人たちは違うのだろうか。後者の考えは非常に興味深いので、少しこれについて考えてみたいと思う。

21才あるいは22才以上の人をすべて若人の中に入れるとすれば、それ以上の年齢の人はすでに地獄の幾分かずつを自分のものにしてしまって容易には手放さないだろうということに気がつくのは当然だと思う。さらに、あなた方がこの年齢に達した時には、3~4才年下の人々はむやみに欲しがりすぎるという理由をつけて、絶対に自分の分を渡すまいとするであろう。そして、その人々が同じように働き、持分を獲得しても、自分の分は取らないだろうと考えるのである。

しかしながら、たとえ若人（だれであろうと、また年齢に関係なく）が他人の家や土地などを譲り受けるのに成功したとしても、経験や長年みがいた技術を必要とする仕事、持場、地位などはどうであろうか。

たとえば劇作家の場合について考えてみよう。大衆はシェークスピア劇を書きたいと思っている人をいちいち考慮に入れている。それぞれ個性があって、自論を持っている。同様に画家や彫刻家、音楽家、法律家、その他数々の職業、また工業財界の如何を問わず大事業を運営する人についても同じことが言える。同じ原則が学校や教会その他人生のすべての場に通用する。人は、責任の重い場所には経験を積んだ信頼のおける人材を望むものである。しかもこの経験とか信頼、信用は長いことかかって実を結ぶ。

勉強すればできると言うかもしれない。確かに若人はやれるだろうし、それで問題は解決する。しかし学ぶには時を要する。時は年に変わり、年は若さを失わせる。もし世界が若人のものだというのがなら、年をとる間に若さを失いながら世界を自分のものにしていることになる。

物質的なことがおろそかになっているという意見があるかもしれない。然り、私たちには食物飲物、着物などがついてまわりこれらも重要なものだと思う。しかし私たちは、適切な表現かどうかかわからないが、

「さらに豊かな人生を」もたらす高い次元のことについて考えているのである。若人の中には、新しい経済法則、政治上の主義財政学上の規則、国際関係の原則などを考案中だという人々がいる。しかし、古い人々がこれらの時代遅れかもしれないが、必要なことをやっていることを知って欲しい。

勉強を重ね、よく考えてみれば、現在の経済、政治、財政、国際関係が少なくとも過去の状態を最高にしたものだということがわかるであろう。しかしすべての悪い部分が取り去られたというのではなく、数世紀を経て悪いものは消え、よいものが残っているのである。

しかし時代は、私たちが経験しなかったような問題を若人にもたらしている。私たちの時代には、自由やその保障がおびやかされるようなことはなかった。今日ではどこにおいても自由がおびやかされている。私たちの周囲には不法や無秩序、欲、不尊がはびこっている。自由主義政体、民主主義政体が挑戦を受けている状態である。それらを救うとすれば、昨日の若人、ここにいる若人、明日の若人がやらねばならないのである。

私たちはどんなものにせよ偽りを立てたり、それを尊んではならない。偽りの人生、偽りの生活、標準、思想、信条、原則、また偽りの友、にせ予言者、偽りの教会や神を絶対に尊んではならないのである。

私は人の幸不幸で自分の人生に楽しみや益を見い出してはならないと思っている。現在世の中が何よりも必要としているのは、自分のものと人のものを理解することである。人の権利と幸福を認めて初めて、自分の権利と幸福を受けるにふさわしいと言えよう。そうでなければ、世の中には平和、安全、自由は存在し得ない。こうした過去があって、文明は存続しているのである。あなた方がこのことを心によく思い計り、真理を悟るように祈りたい。そしてこの真理を自分の行動の指針として欲しい。

過去1世紀以上にもわたって、次の宣言は教会の信条となってきた。「政府は各個人に対し良心の自由なる行使、財産の所有権とその管理、および生命の保護などを保証する如き法律を制定し、且つこれを犯さることなく保持するにあらざれば、如何なる政府も平和に存立するを得ず。」（教義と聖約134:2）

今日これらに反するような世の運動は、

上記の精神から出たものではない。

このことに関連して、次のことを考えていただきたい。たとえ同じ誤りを犯しても標準に従わなかったのと標準を変えたのとでは違うということである。社会にはいろいろな犯罪すなわち放火、略奪、盗み、殺人などが広く存在しながらも、それらは社会秩序や人々の良心に抑えられていた。しかしこれらの犯罪が人々を導く筈の標準と化してしまったら、どんなに立派な理由や必要性を出したとしても、またいかに犯罪の状況を制限したとしても、私たちの社会は存続しない。1例として、標準は正しいのにそれを曲げる人、正しくない標準にすべての人が服従している場合がある。世界が現在かかえている問題はこの最後の点にある。この問題を救うために、人間の自由と良心の自由を守るために、そして人の霊を救う主のみ業が地上に進められるために、あなた方若人の力を借りなければならない。

クジーク副管長が近代の若人に向けた説教の中で今1つ有名な言葉をさらにここに記す。「性欲は食欲やどの乾きと同じで満たされるべきものであるという考えがあるが、本来すばらしいはずの人間の感受性にとってこれほど有害で、これほどその意味を曲げられた基本的な問題はない。この教義は悪魔から出たものであり、破滅に導く。成熟した心と鍛練した心から生ずる自制を持ち、また待っている霊たちに肉体を与えるという神の計画を遂行するために備えられたとして性を神聖なものとする時に、性はその節度を保つことができる。しかしこの性も未熟で鍛練されていず、知識や知恵がまだ十分ではない若人の身体で活動を命じられると、あたかも煮立ったかまのように本能をむき出しにして、肉体的にも道徳的にも破滅という傷跡を残すようになる。

両親としての神聖な責任を担うあなた方若人よ、自分と子供たちを獣のように低くすることのないように。天使のごとく自分自身を高めるように。」

脚注

1. マキャベリ、ニコロ イタリアの政治家思想家1469—1527
2. マタイ 5:45参照

教会は真理を独占しているのか

ジョン・A・ウィットォー長老

ジョン・A・ウィットォー長老

十二使徒評議員会会員（1921～1952）

インプルーヴメント・エラ編集長（1935～1952）

二のように質問する人は回復されたキリストの教会の主張するところを全く誤解している。

真理を独占するとは、あらゆる真理を持ちながら教会外の者に真理を与えず、真理からもたらされる恵みを与えないという意味であろう。

教会の教えにそのようなことがあるはずがない。予言者ジョセフ・スミスの時代から、真理の光は地に生まれる万人を照らすと教えられてきた。教会内外を問わず、真理を求める者はすべてそれを見出すことができるのである。図書館、実験室、自然界で真理を熱心に求める者は、尽きること知らない真理の泉から報いを得るであろう。真理の源である方は寛大である。教会はあらゆる所に住むすべての人々が絶えず真理を求め続けるよう努めている。なぜならば、人は真理を知れば知るほど多くの喜びを得るからである。

しかしながら、真理には多くの種類がある。地球と天体の情況を決める自然の法則に関する真理があり、これによって事物が動き、運行する。これは大切な知識であって、人類はその物的知的恵みを受けている。このような真理の発見により、あらゆる家庭に光と

慰めを投げかける現在の文明がもたらされているのである。

以下にあげるような高度の真理もある。人間の行動に関する真理すなわち受けている知識という賜の使い方に関する真理、天に在します神に関する真理、人間と父なる神との関係に関する真理、過去のなぞを解き、現在の目的を明らかにし、人の行く末を予言する真理、人が用いさえすれば永遠に神に近づかせ得る真理である。

この後者の高度の真理が主イエス・キリストの福音に述べられている救いの計画を形成している。福音は主の思いとみ心から生まれており、宇宙を貫き、あらゆる事実、律法、原則を含みあらゆる自然の働きを活気づける神の目的を教えている。このように全き福音は真理の家となり、あらゆる真理はこれに一致している。真理の家である福音は、あらゆる真理を主張し、人の現在と将来の幸福のためにあらゆる真理を正しい場所と位置に置いている。

福音の真理は他のすべての真理と同様、あらゆる人が求め得る。事実、おそらくあらゆる人はこの根本的な知識の一部を知って、大いに安らぎを得ているのである。神を信じるすべての教会にこの高度の真理があるのは確かで

ある。これは末日聖徒の教義である。

しかしながら、福音は地上において主の権能のもとにあってこそ、効力を発揮する。主は人を地上に置き、福音を与えられた。主は初めより人の子らを見守り、人の背教により福音が必要とされる時々主の教会を確立してこられた。教会を管理するため、福音は神権と呼ばれる権能を与えてきたこの権能を持つ教会だけが完全なキリストの教会であって、それは、一つしかない。

末日聖徒イエス・キリスト教会は主イエス・キリストの真の福音に関する真理、唯一の神の救いの計画、キリストの教会を神のみ名において設立する権能を有している。

福音は一つであり、神権は一つであり、福音のすべての真理を有する教会は一つである。この意味で、神の日の光栄の王国において全き救いを受けるに必要なすべての根本的真理を有すると主張する教会はただ一つである。

これを独占と言うならそれも良からう。この教会は、へりくだり、感謝しつつ、全人類を、主のみ前にあって永遠の進歩に導く完き知識にもたらすという高度な任務、大いなる責任を強く感じている。

家庭の夕べ



ジョセフ・F・メリル長老*

エラ 1918年1月号

兄弟姉妹の皆様、私はこのタバナクルにおいて過去何回となく話題にのぼっている家庭の夕べについて話すように求められた。私たちがそんなに忘れっぽく、また無関心で自分たちのためになることを絶えず思い出させられる必要があるのかと不思議に思われるかもしれない。これは、私たちが信じていないからでも、指導されずめられたことに共鳴しないからでもなく、置かれている状況によるのである。普通の人々は最良の環境のもとで努力し、働いている。義務や責任が数限りなくあり、なすべきことをたくさん抱えている。こういった状況が原因で本来やりたいことがやれない時がある。また疲れてしまったり、他の妨害があったりという原因もある。

末日聖徒の中でどのくらいの人々がおぼえているか知らないが、私は何年も前にこの話題が出されたことを非常にはっきりとおぼえている。その時私たちは次のように約束されたのである。もし忠実かつ熱心に家庭の夕べを行なうならば、家族からだれも脱落する者はなく、このシオンのステーキ部

にある家庭には平和と愛、純潔と喜びがあり、それらは理想的な家庭生活の場を与えてくれると。両親は子供たちに良い影響を与え、子供たちが忠実で真実を守り、清純に育っていつまでも清らかな姿を見えるというたとえようもない喜びを受けるであろうと。また子供たちの足は悪魔のわなや落とし穴から遠ざけられるであろうとも約束されたのである。

これらの約束があり、そしてステーキ部内のワード部で家庭の夕べを行なうように言われたにもかかわらず、現在のところほんの数家族が家庭の夕べを行なっているというのは疑問の余地がない。しかも、兄弟姉妹の皆様、心から家庭の夕べを行なっている人々は家庭に大いなる祝福が訪れているという証を持っているのである。しかし不思議なことに、ワード部の責任を預かっている人々でさえも時々忘れていた。私たちは家庭の夕べの日にはいろいろな会合をやりくりしている。その晩は末日聖徒が家庭で過ごす晩であり、会合は他の時にまわすように言われている。

私たちが考えたり行動することに相違が生ずることはない。また家庭には両親として逃れられない責任がある。(教義と聖約68：25—28参照)

だれかに責任を転嫁することはできないのである。私たちが誠実で偽らずイエス・キリストの福音を信ずるならば、家庭における責任以上に大いなるものはないことを知っているはずである。父親は、家族すなわち妻や子供たちに対して偽らず、忠実と誠実を示し、真心から家族のために働かなければならない。自分を心から頼りにしている人々に真実でなければならない。その全生涯は彼らのために真心から捧げられる。不親切をすることなく忍耐をもち、しかも忍耐とやさしさと愛の精神を示さなければならない。友として助け手として妻を扱い、最も縁の近い、愛する者として子供たちを扱う。母親も同様に夫と子供たちへの責任をおぼえなければならない。子供も両親への責任をおぼえる必要がある。

もし福音に教えられている通り完全に家庭生活を営むならば、週に1度家族が共に集まり、1週間で1番楽しく



ジョセフ・F・メルリ長老
十二使徒評議員会会員
(1931—1952)



有意義な時とすることができるであろう。また父親たる自覚を持った父親と母親たる自覚をもった母親、そして従順の精神をもった子供がこの忠告を受け入れて家庭の夕べを開くなら、他では決して得られない影響や喜びが生まれるであろう。

大家族のために子供たちも赤ん坊から大人までいて、いろいろな責任を抱えている家族もあるだろう。そういう家庭では全員が一緒に集まる時間を作るのがむずかしい。しかし古いことわざにもあるように、精神一到何事かならざらん、為せばなるのだと思う。1週間の中で、家族の愛を養い、教え、理解し、互いに心を通わせるためのほんの少しの時間もないということがあるだろうか。子供たちと心をひとつにしていない両親は家庭をおろそかにし、与えるべき影響を与えていないことになる。父親にも母親にも子供と親密になれる可能性はある。子供が喜びや悲しみ、悩みをうち明けられるような親友にもなれるのである。

ところで皆様は、これらのことがあまり重要ではないと考えているかもし

れない。しかし私たちはこのことが最も大切なことであると信じているのである。以前とは違って私たちは目を覚まし、悪と悪に向かう風潮を追い払わなければならないことを信じている。そしてかつてないほどに、できる限りのことをして働かなければならない。悪魔はいろいろな方法で働きかけている。悪魔の時間が短くなればなるほどその力を増し、私たちが活発で注意を向けていないと、思いもよらない方法でわなにかけていることに気付くであろう。このため、私たちには祈りと働き、そして与えられた忠告を守ることが必要だとわかるのである。

兄弟姉妹の皆様、このシオンのステークス部におけるどの家族でも、日曜日の晩を家庭の夕べとしたい。家族の者が共に集まることは、分家すなわち、結婚した息子娘たちにも反対はないと思われる。習慣になるまでやってみようではないか。特別に必要を感じていない人や、子供たちは皆大きくなってしまっ

て両親だけが残されていると感じている人がいるであろう。大家族、小家族、年令層の如何にかかわらず、

歌や話、ゲーム、読書、経験、説教、祈りなど、全員にとって楽しく有意義なプログラムを組むことができるのである。

何かの理由で子供のない家庭にも、この家庭の夕べは有益である。無関心と忘れっぽい性質のために、自分の妻のきげんを取らない夫がいるだろうか。彼女と2人きりの晩をととても大切に思った時があったのではないか。妻のきげんを取らない夫など実に哀れなものである。人生の甘美な部分を家庭から追い出し、家庭を家庭でなくしている。それは単なる生活の場にすぎない。愛のない所に家庭は成り立たない。

私の知る限りでは、家族と共にこの楽しく有意義な夕べを過ごさないでよい理由は1つも見当たらない。もしこの家庭の夕べを行なうならば、他では決して得られない愛と一致、平安の精神、満足が家庭にもたらされるであろう。

※1917年8月26日、日曜日、グラナイト・ステークス部四半期大会における、ジョセフ・F・メルリ博士の話

扶 助 協 会 の 組 織

ベル・S・スパッフォード会長

扶助協会誌 1963年11月号

1842年1月6日付の教会歴史記録には、予言者ジョセフ・スミスが教会の歴史におけるこの時期を喜んでいることが記されています。「新しい年が幸先よくその歩みを始め、歩み続けている。聖徒たちは寛大で思いやり深い神の力を思う存分得て、いと高き神の神殿を築くため数々の方法に恵まれているかのようである。そして神はこの神殿の完成を、教会のみならず世の中にある最も重要な出来事として気づかいながらも期待しておられ、シオンの聖徒たちをして喜ばしめようとなさっている。……真実これは末日の聖徒たちに長くおぼえられる日である。……完全なる福音、各神権時代にあって完全なる神権時代、さらに時満ちたる神権時代をもたらすためにすべてのものが集められる日である。」(教会歴史記録、第4巻英文P.492)

事実、これは教会の歴史にあって多事な時期、すなわち聖徒たちにとって喜びの時期であったことを証明しています。長くおぼえられるような時代の出来事が起こったのです。

数々の出来事の中にあって、教会の姉妹にとって最も重大な意味を持つ出来事は、1842年3月17日の婦人扶助協会創立でした。これは主が予言者を通して、娘たちがさらに完全になり、教会と教会員に対して良い助け手となるための組織を与えたもうた恵みの時です。

姉妹たちのこの祝福に対する備えはすでに明らかでした。福音を学び、予言者の言葉に耳を傾け、その教えに従順でした。また教会においてもよく働

き手であり、特にノーヴー神殿建設の折には女性の役割を十分に果たしたのです。姉妹たちはさらに完全な働きをなすことを熱心に求め、イライザ・R・スノー姉妹が規則と細則を決めた組織について予言者の承認を求めました。

扶助協会の組織を作るきっかけとなった状況について、サラ・M・キンボール姉妹は、姉妹たちがノーヴー神殿で働く人々を援助するために、自分たちの力と手を結集するような「女性の集い」を作りたいと思っていたと記しています。予言者は次のように答えました。

……これはあなたが望んだのとは違う。姉妹たちの捧げものは主に受け入れられていると告げよ。主は姉妹たちのために紙に書かれた規則よりもさらによいものを持っておられる。来週木曜日の午後に姉妹たちを招き、私と幾人かの兄弟たちとを交えて、私の店の向かい側にあるマソニック・ホールで会いたいと思う。そこで私は神権者たちの組織にならない神権の管理のもとに姉妹たちを組織しよう。(扶助協会100年祭 P.14)

数にして18名の姉妹たちが約束の時と場所、すなわち1842年3月17日に会見した時の思いは、まさに喜びと熱望に他ならなかったことが察せられます。姉妹たちは感謝の心をもって、愛と尊敬の的である予言者の口から次の言葉を聞いていました。これは教会の姉妹たちが長く心におぼえている言葉です。「今私は、この協会が議会の慣例に従って会長と副会長のもとに組織されたことを宣言するものである。」

(扶助協会誌、1942年3月号P.151)

この記念すべき場に、ウィラード・リチャーズ長老と共に予言者の側近として居合わせたジョン・ティラー長老は、姉妹たちに向かって「この会が天の律法にのっとって組織されたことは喜ばしい」と挨拶しました。(扶助協会誌、1942年3月号、P.151)

天の律法は神の律法ではないでしょうか。それならば、扶助協会は神の律法により組織されたと言うにふさわしいのではないのでしょうか。

扶助協会の100年祭において大管長会は次のように注意を促しています。

私たちは、この組織が世にあって特異な存在であることを扶助協会の姉妹たちが忘れないようお願いしたい。なぜなら、神と御子が親しく訪れたもうて、末日の時満ちたる神権時代を開くよう偉大な予言者を召し、姉妹たちはこの予言者に与えられた主の靈感によって組織されたからである。地球上のどこを探してもこのような起源を有する婦人の組織はない。(扶助協会100年祭、P.7)

サラ・M・キンボール姉妹は扶助協会の記録で、婦人がこのように組織されない限り教会の組織は完全とは言えないと述べた予言者の言葉を記しています。

予言者によって立てられた扶助協会の歴史と働きは、今や200年目に向かっています。過去121年の歴史において世の中と人々の間に非常な変化が起こっています。それらの変化の中にある、女性の地位が向上し、女性が組織されたグループを通じて進んで発言

し行動するようになったことは、大いなる出来事だと思われます。扶助協会が創立された当時、ごくわずかな勇気ある女性が公衆を前にして話ただけであって、組織を作るなどという勇敢な人はさらに数えるほどでした。

驚くべきことにこうした変化や発展がありながら、扶助協会組織の基本的な機構、予言者ジョセフ・スミスが定めたきまりや当初の目的が変わることなく存続し、121年前にうちたてられた通りにその機能を後の世まで保っているのです。

これは、扶助協会が人の律法ではなく神の律法に従って組織された証明に他ならないと思います。

扶助協会は、ノーヴーの時代において、絶えず予言者の見守りのうちにあり、その導きと勧告を受けていました。そして、彼につぐ神から選ばれた予言者たちの見守りを今もずっと受けているのです。かの予言者は姉妹たちへの言葉の中で、姉妹たちは神権の組織にならって神権の管理のもとに組織されたとはっきり宣言しています。姉妹たちにこう告げています。

「あなたたちは、神がこの神権時代において教会を導き、教えるように任命したもうた人々の使う権能として与えられた神権によって導きを受けるであろう。」さらに姉妹たちに教えています。「もし会の計画を遂行する役員が必要な場合は、その人を指名し任命させるように。」(予言者が教会員によって選ばれると言わなかったことに注目して下さい。)彼は扶助協会の会員に特権を与えました。しかも、「非難を

振り払って」その門戸をすべての女性に開放しました。すべての女性は予言者の指示通り挙手により会員となるのです。

会の規則や細則は、最初予言者に報告されていました。彼は言っています。「この会の会長会は中心となって業をなすように。会長会が決定したことは律法と認められ、そのもとに働きがなされる。……集会の議事録はあなた方の規則と律法に従って行動する時の先例となるであろう。」(扶助協会100年祭, P. 15) こうして扶助協会は初めより規則にのっとって行なわれてきましたが、現在もその通りです。

予言者はこの神権時代の婦人に道を開放しました。彼の口から出た感銘深い言葉は大切にしなければならないと思います。「私は今あなたの方にかわって鍵を回している。そして知識と英智とがこの時から流れ出るであろう。……これは貧しい者、困っている者にとってさらによい時代の始まりであり、彼らは喜び、頭に祝福を豊かに受けるであろう。」(教会歴史記録, 4巻 P. 607 1967年3月号聖徒の道, ベル・S・スパッフォード「高められた女性」1967年扶助協会125周年記念に発表された劇, 「賜」)

扶助協会は神により組織され、天の律法に従って神の靈感により規則が定められているが、その使命も同様に神から示されたものです。その使命を簡単にあげてみたいと思います。

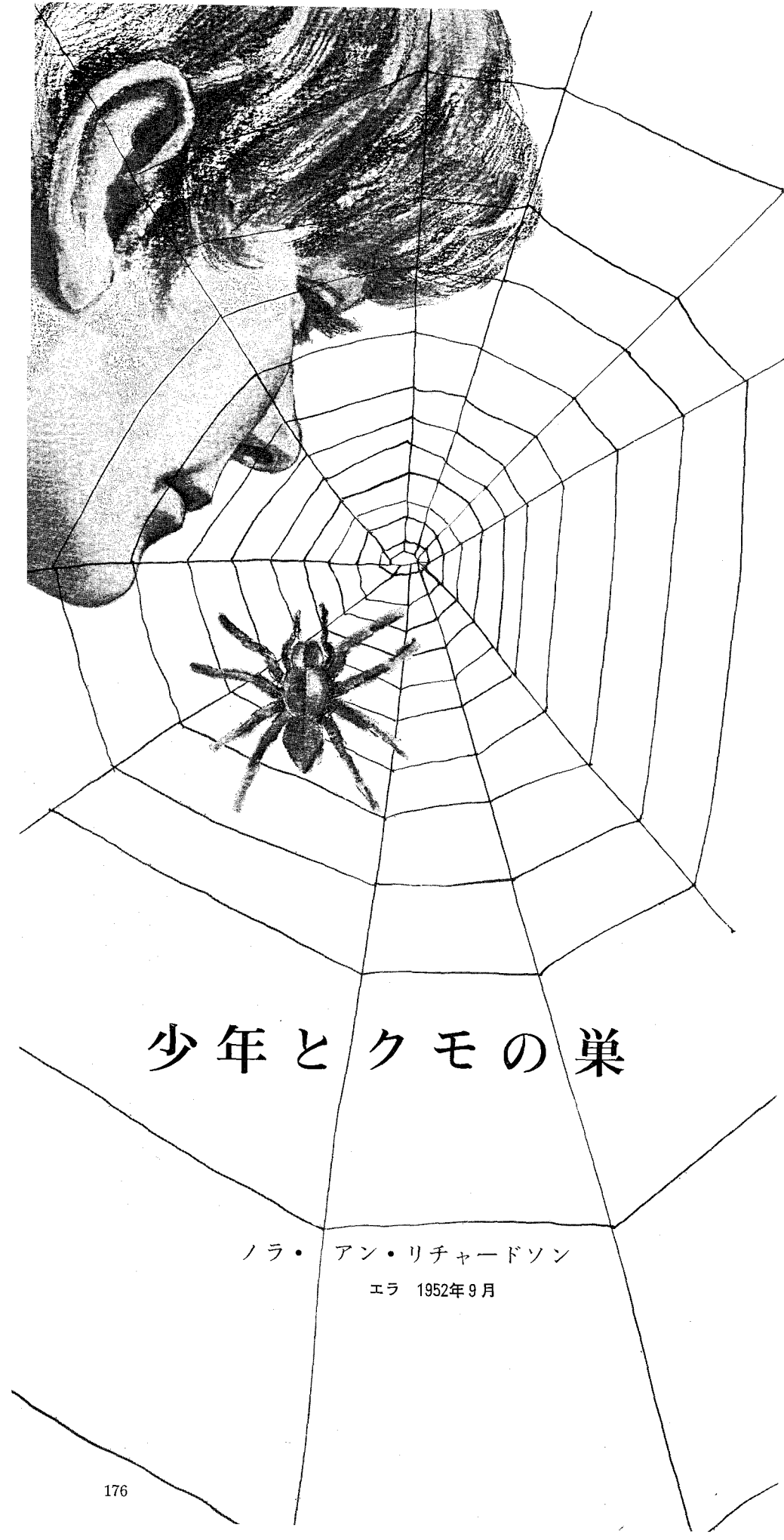
1. 人を救う。
2. 回復された福音が神よりのものであるという証を強める。

3. 困っている人を助ける。
4. 姉妹の才能と能力を伸ばす。
5. 家族と家庭生活を高める。
6. 地上に天父の王国を築くうえで神権者の助け手として働く。

確かに、扶助協会は自由意志という神からの律法を理解し、末日に予言者を通して啓示されたように、人は神聖であって神は子供たちに生命と救いの計画を与えられていることを認識しているのです。そしてこれらの知識を世界中の女性に知らせ、自由と主が教えられた生活を確認するためにその力を発揮するという大きな責任を持っています。

世の中にあってこれほど大きな責任を抱えている婦人の組織はないでしょう。またこれほど力強く、賢明で、正しい指導力を有する婦人組織として確かな存在はないと思います。私たちは正しい真実の経路を通して、また権能ある神権者によって委任された権能に従って働かなければなりません。しかも、神よりの啓示によって与えられている真理を世の女性に知らせる必要もあるのです。

神聖な使命を受け、時代と世の変化に染まることなく、扶助協会は女性たちを落し入れようとしている悪の力から守る役目をする必要があります。それは世界中の女性にとってかがり火とも道しるべともなるに違いありません。



少年とクモの巣

ノラ・アン・リチャードソン

エラ 1952年9月

井 当箱をぶら下げ、庭を重い足どりで歩いているダーシーを、マーサは湯気で曇った窓ガラスを拭きながら見つめていた。彼女はダーシーが今朝は間に合うだろうか心配だった。元気ならたいてい歩いて20分もすれば学校へ着くのだが、今朝は1時間も前に送り出したのである。

彼女は眉を曇らせ、古い陶器のバター製造器のところへ行って木製のかくはん器を回わした。ダーシーはやっと7歳になったばかりだけれど、彼の人格形成を考えてもそれほど早すぎはしないなどと考えていた。ダーシーはいい子だけれどぼんやりしているところがあった。ちょっとした仕事を頼んでもたいてい他のことに夢中になって最初に頼まれたことをすっかり忘れてしまうところがあった。

若いマーサ・リードは自分の責任と真剣に取り組んでいた。4年前の電報以来一層真剣であった。それは、責任を自分ひとりで背負わねばならないという知らせであった。近所の人たちは若いけれどなかなかよくやる立派な人だと思っていた。マーサにはばかげたことをするようになってしまったし、その評判には自信を持っていた。ダーシーの評判はどうなるのか、マーサはそんなことを考えていた。

「学校に遅れる、学校に遅れる。」かくはん器がそうささやいているようだった。

ふいに彼女は大きな麦わら帽をつかむと、急いでそこら辺にいた赤いめんどりを追い払いながら庭を走って行った。今週はずっと遅刻続きで、まったく恥ずかしいことだ。彼女はダーシーが学校に間に合ったかどうか調べようと思った。

ダーシーの手を引っ張って連れて行こうかなども考えた。おだやかな秋の早朝、彼女は大まかでどんどん歩いて行った。そうしながら、彼女はもう考えるのをやめていた。郡道に続く近道は森の中にあった。マーサは松葉の散った狭い道を注意しながら歩いて行った。彼女は、ここ数か月忙しくてすっかり忘れていたやわらかい木の香にはっとする思いがした。

マーサが小川の傍まで来ると、つぶ

れたお弁当箱を片側に置き、くい入るように水の中を眺めているダーシーを見つけた。彼女は、腹立たしく思いながらダーシーをつかまえようと歩み寄った。

彼女の足音に気がついて、ダーシーはしし鼻の顔を彼女の方へ向けた。その拍子に赤い毛がパバリと目にかかった。彼は父親をそっくり小さくしたようだった。

「シー、見て！」ダーシーが言った。小川をまたいで生えているやぶが少し動き、ジャコウネズミがじっと2人の方を見ながら泳いでいた。

「おい、今朝は何をつかまえたのか。」ダーシーが声をかけた。

ネズミは向きを変えると、ゆっくりと向こう岸の隠れ場所へ戻って行った。

「ぼく、毎日あいつに会っているんだ。」ダーシーはもう終わったというような調子で説明した。「時々石を投げると、あいつ、その上を泳いで行くんだ。ゲームみたいなんだ。」彼は少し不満げに母親を見た。「でも、あいつはお母さんをこわがっているんだ。大人は好きじゃないのさ。」

「そうでしょうよ。ところでダーシー、お弁当箱をひろって、学校へ行った方が良くと思うけど。」

「ああ学校か。じゃ、行って来ます。」

「お母さんも少し歩きますよ。」マーサはお説教をしようと思っていたができなかった。

「でも……」ダーシーは松の香がする道を彼女についてとぼとぼ歩いて行った。森の中はさわやかだった。マーサはのんびりと歩いている自分に気がついた。ここしばらくそんなふうに歩いたことがなかった。いつもしなければならなかったことがたくさんあった。ひよこや3頭の牛の世話、それに牛乳の上皮をすくい取って冷やし、バターを造る仕事があった。

気がつくと、一緒について来たはずの息子がいなかった。

「ダーシー、ダーシー。」

彼女がふり返ると、ダーシーは少し離れた所にかがみ、頭を地面に近づけていた。彼女は近づきながら言った。

「何しているの。」

マーサは地面に目をやった。黒くつやつやとしたアリが数匹小さな道を行ったり来たりして、互いにぶつかり合いながらせわしく動いていた。

ダーシーはアリが通る道に小枝を置き、アリたちが驚いて散って行くのを見つめていた。

「地震だよ。」ダーシーが言った。

「走れ。地震だよ。」「中国みたいだ。」彼は突然マーサにそう話しかけた。

中国みたいとは何のことだろうか。ダーシーが弁当箱を開き、サンドイッチをちぎってアリの方に投げてやりながら残りを食べているのを眺めてマーサはじっと考えた。

人間たちが不思議そうに見ているとも知らないで、小さなアリは大きなパンのかたまりをわけもなく急いであちこちへ運んでいた。森やしーんとした静けさにも気がつかない様子だった。

ダーシーが先に立ち上って言った。

「お母さんに見せるものがあるんだよ。」彼はマーサの先に立って、去年倒れた松の木がそろそろ腐りはじめている所へ行った。「こっちへ来て。お母さん、このやぶの中だよ。」

マーサは、日の光を浴びてキラキラと輝く見事な型をしたくもの巣を見思わず息をのんだ。

「ほら、お母さん見て。」ダーシーがまるまった葉を投げると銀色に輝く巣の上にひっきり、そしてかすかに揺れた。

マーサは思わず口を開けてそれを見つめた。かっ色のくもが糸につたって下りながら踊っているようだった。音もなく下りて行くと、振り返って緑色の葉を心配そうに見つめ、仕方ないというように網状の巣から下りた。

「こいつはハエが好きなんだ。」ダーシーの手がずっと伸びて、木をつかみ、くもの巣に近づけたかと思うとハエを逃してやった。糸はまた揺れた。くもは一目散に逃げたが、糸からは離れなかった。

「くもがハエを食べると、カエルがくもを食べるでしょ。そうすると今度はヘビがカエルを食べちゃうんだ。」

ダーシーはまるでマーサの考えていることがわかっているかのように、まじめな顔で説明した。「それが自然なんだね、お母さん。」

「そうよ。そうだと思うわ。」彼女は丸太に腰かけながら言った。遠い昔からずっと、静かな目に見えない戦いが日ごと夜ごと森の中できりひろげられていた。彼女はそんな戦いを感じながらも不思議と心は平安だった。彼女の心に夫のダーシーが浮かび、彼と共に木の茂った丘で過ごした夏の日のことを思い出した。彼の黒髪が灰色の目に無造作にかかっていた様子や、指で道に小さな四角形を描きながら話した時の低い物静かな声を思い出していた。彼がいたらきっと、こんな小さなことでも知っていれば、大きなことがわかるものだ、と言ったに違いない。

遠くの方から、鐘の音が聞こえてきた。彼女は何の音だろうかとぼんやり考えていた。

ダーシーが小さな声をあげて言った

「いけない。学校の鐘だ。」

「急いで」マーサはお弁当箱を渡しながらか言った。「ほら、走って。また遅刻しちゃうわ。」マーサは、土ほこりをあげながら郡道に出ると曲がり角に沿って走って行く息子の姿を見ていた。それからゆっくり歩いて前の丸太に腰かけた。くもはもういなかった。ハエの姿も見当らなかった。くもの巣だけが元のように露に光っていた。こんな小さなことでも知っていれば。愛する神様、どうぞダーシーがそのように育ってくれますように。彼女は心の中でそうつぶやいた。

マーサは日が高くなって暖められた空気を快く感じながらひとりではほえんだ。「あなたは自然そのものだよ」彼女は、見えないクモに向かって言った。まるで彼女のように、小さな戦いに追いかけている生活だった。

でも違うのだと思いながら彼女は家の方へ、バター製造器やにとりや牛の方へ向かって歩いて行った。人の生活には、小さくて気がつかない勝利がたくさんあって、かちどきの歌を歌いたい気持の時がある。そしてきょう、私には小さな勝利があったのだ。



愛する兄弟姉妹の皆様

今私達が皆様方への最後の挨拶を「聖徒の道」に記載していただこうと準備していますと何かしら皆様方に対する愛と感謝の気持ちで胸がいっぱいになって参りました。

3年の年月がこんなにも早く立ってしまったのかと思いますととても信じられない位でございます。過ぎ去りし3年間を振り返って見ますと私達はいかに皆様方が親切であり、温かい心で私達に接してくれたことかとそのことがばかりか思い出されます。皆様方はいつも私達の足もとを照らして下さいるように努力され、又家族のために私生活をよりくつろいで生活出来るように取り計して下さいました。

皆様方はいつも私達を支持し助けて下さいましたし、日本語を私達がよく学べるように色々とお励まして下さいました。又私達に皆様方の強い「証」を示して下さいますことにより私達をより強めて下さいました。私達がこの日本の地に来て払った犠牲は皆様方が教会の発展のために毎日尽していられる犠牲にくらべればほんとうに小さく見えます。皆様は私達の宣教師を愛し

て下さることによって私達をよく助けて下さいました。いつも皆様方は宣教師を励まして下さいました。

その御協力の結果としてこの短い3年間の間にモルモン教会に於ける最も素晴らしい伝道部の一つにこの伝道部を作り上げることが出来ました。主の王国建設のために皆様方が果たされた偉大な働きに対して私の様なつまらないものですが心をこめて讃辞の言葉を送りたいと思います。ペテロは主イエス・キリストに自分の主に対する愛をいかに示すことが出来るのでしょうか？とたずねました。その時、主はペテロに「私の羊を養いなさい」と答えられました。私も『もし皆様方が主を愛するならば常に主の羊をやしないなさい』というその愛の言葉を送りたいと思います。もしこのことをなさるなら、いつも皆様方は活発な会員として主に近づけるでしょう。

このことは皆様方がいつも幸福で主よりの大いなる祝福を受けられることを約束してくれます。

私達がコロラドに帰ってしまいますと、たとえそれが数百マイルはなれていようと、福音のあたたかさによって皆様方とその兄弟姉妹として堅くつながっておれますようにお祈り致します。再び日本を訪れ皆様方と一緒に生活出来ますことを心より待ち望んでおります。私は福音は真実なものであり、このモルモン教会は末日に於いて建てられた真実の主イエス・キリストの教会であることを証します。

どうか皆様方がいつも福音を真実なものとして受け入れ生活に生かされますように、主の最も素晴らしい祝福が、皆様方一人一人の上に、いつも又いつまでもそそがれますようにお祈り致します。アーメン。

<本当にありがとうございました！岡崎伝道部長御夫妻！>

日本人よりも日本を愛され、みそ汁と和服を好み「大和魂を示してくれた伝道部長。最も日本人らしい伝道部長だった岡崎行雄部長御夫妻ニコニコいつも笑顔を見せ、フェローシップの手本を示され、日本人に大きな愛と献身をささげられた岡崎部長御夫妻。ありし日の部長御夫妻の姿をスナップ写真でもう一度追ってみたいと思います。そしてその業績をほめたたえ、感謝し、なつかしもうではありませんか。



最も素晴らしい記録は1か月で136名の改宗者を出されたことですが次にその業績を写真で追って示します。①マスター・Mメン、ゴールデン・グリーナー賞を初めて日本に紹介されました。②日本人のオナラリー・ゴールデン・グリーナー賞を日本に紹介されました。③パザー等々は料理の講習会を開いたり、クッキングスクールを指導され伝道に役立てました。④ホームプライマリー及びベニパレードを活発にして下さいました。⑤宣教師によるダンスバンド「ライジングサンズ」の結成をされ伝道に大いに役立てました。⑥モルモン館献堂式を成功させました。⑦万博映画「幸福を求めて」の製作に協力され大きな力を発揮されました。⑧第二回日本東部、日本伝道部、ステーク部、西部伝道部、韓国伝道部合同のハワイ姉妹訪問を成功に導かれました。⑨日本中央伝道部、日本西部伝道部合同のMIAコンファレンスを主催されました。⑩MIAコンファレンス

日本伝道部 松本支部

鍬入れ式



「いつの日にか、日本の国に多くの教会が建つであろう、マッシュウ・カウリイ使徒の述べられたこの言葉が1971年4月3日に再び思い起こされました。この日、もう一つの教会堂を建てるべく、鍬入れ式が松本にて行なわれました。松本の人々は、この特別な日を長い間待ちこがれてきました。約70名の出席者があり、私たちが行なった事は隣人たちの興味をそそりました。

その日は本当に良い日でした。少し寒いくらいでしたが、集まった人々の中にあった御霊と証詞はそこにいるすべての人々に暖い気持をもたらしました。

ビルス伝道部長はその御家族と共に出席なさり、西地方部の青柳地方部長がその会の司会をされました。彼の話に続きビルス伝道部長がこのすばらしい経験と機会について、また主がいかに日本を、そして松本の人々を祝福されているかについて話されました。

また、出席者の中から市長代理の方が話され、その中ですばらしい態度と模範故に、また新しい教会堂が松本市のためになし得る事について讃辞して下さいました。

宣教師を種々な面で助けて下さっている五味先生（医師）



も、モルモン教会とそこに集う人々がいかに彼に感銘を与えるかについて話して下さいました。

美しい歌が松本支部の聖歌隊によって歌われ、その会に御霊を増し加えました。

礼拝堂は12月に出来上がる予定です。建築宣教師が召され、支部の会員たちが出来得る限りの方法でそれを援助します。グレン・ハンディ兄弟、ハンディ姉妹と彼らの愛娘デボラーが松本で奉仕します。

主のためにもう一つの美しい礼拝堂ができることは松本の人々にとって、また日本伝道部にとってもすばらしいことです。

新聞社からの出席者もあり、松本の新聞にはすばらしい記事がのりました。

日本東伝道部



友よ大地に明日を築こう！

「主の山に登るべき者はだれか。

その聖所に立つべき者はだれか。

手が清く、心のいさぎよい者、

その魂がむなしき事に望みをかけない者

偽って誓わない者こそ、その人である」

詩篇24：3－4

北海道の大自然の中で、日本東伝道部のユース・コンファレンスがくりひろげられます。

8月7日（金）から9日（日）まで充実した意義深い日々が続くよう役員たちが今着々と準備しています。

6日のスポーツ大会は、札幌市立体育館で、9時から開会式に引続いて行なわれます。各支部、伝道所で1チーム以上のバレーボールチームを編成し、当日は予選に残った4チームの決勝戦のみを行ないます。また後半はインスタントチームの試合、小さい子供の運動会と、家族の全員が参加できるプログラムが用意されています。

夜の演劇祭（札幌支部MIAホール）は、東北が阿部順夫兄弟演出の下に、「さっば夜ばなし」。北海道は新江一夫兄弟演出の下に、「夕づる」を上演します。

7日 朝8時から10時迄共にゼミナールに出席します。5



つのテーマに分かれています。どのテーマを選びますか？

1. 偽善とはどんな意味でしょうか。
2. 不一致をどのように解決できるでしょうか。
3. 学問と信仰をどのように関連づけたらよいでしょうか。
4. 人間は過去をどのように変えることができるでしょうか。
5. 職業選択の基準をどのように考えたらよいでしょうか。

10時30分から3時30分までは、思う存分自然に親しんでいただきます。

- 藻岩山登山コース
- 植物園のんびりコース
- プール（オリンピック水泳選手養成コース）
- 観光バス遊覧コース
- 円山動物園お子様コース

当日は宣教師も参加する予定になっています。

夜の6時から9時迄はダンスパーティー（北海道理容美容センター大ホール）で、毎年ここでいくつかのロマンスが生まれると聞きました。ムードの方は小樽支部の兄弟たちが、生バンドでそつなく作ってくださることになっています。

8日 9時から12時迄証詞会（札幌支部）。

副管長ハロルド・B・リー長老御夫妻は、極東訪問の途中日本に立ち寄られ、小松元伝道部長御夫妻と共に日本東伝道部を訪問され、4月19日札幌において特別大会が開かれ、多数の会員、宣教師が参集した。



▲ 4月9日 羽田に着かれたリー副管長

▲ 4月18日夜 ファイア・サイドにて

リー副管長を迎えてステーキ部大会開かる

去る4月17、18日今年最初のステーキ部大会がハロルド・B・リー副管長を迎えて開催された。東京第二ワード部の会場せましとつめかけた聖徒たちは、リー長老の靈感に満ちた話と現状を見通す鋭い洞察力に強く心を打たれた。神権指導者会の席上、リー長老は日本が教会にあって果たす将来の役割と可能性に目を留められて、具体的な目標を示された。

すなわち、このステーキ部の人々の力をもってすれば、聖餐会の出席率、ホーム・ティーチング、家庭の夕べの実施率等において6か月以内に飛躍的な進歩が可能であると述べられ、もしそれらを達成すれば霊性が大いに高まることを約束された。

現職の副管長兼十二使徒会長のアジア訪問は教会史上初めてのことであり、定例ステーキ部大会を6週間も延期しての訪問は異例のことであって、日本の教会に対するまことに深い御心の表われであることがうかがい知れる。

▼ 4月18日 一般大会に集った聖徒たち

▶ 大会後歓談されるリー副管長



自己を見つめる



1951年3月

リチャード・L・エバンズ

「敵の言葉を信じるな」ということわざがある。だが、自分で自分を吟味した結果は信じられよう。では、以下の質問から自分を吟味してみよう。あなたは信じられる人として、自分自身をも選べるだろうか。問題が起こった時、自分自身を満足させたいであろうか。自分をなすがままに放置したいであろうか。もし、あなたは、他人の家、納屋、銀行が閉ざされていないからといって、通行権がないのに侵入するだろうか。貸借勘定、法廷、牢獄、不名誉というものがないければ、権利のないものまでをもとるだろうか。力のない人にも力のある人と同じように仕えるだろうか。売手が必要にせまられて売った場合にも、別に必要でなくて売った場合にも、公正な価格を支払うことができるだろうか。口約束でも文書による契約と同じように守るだろうか。だれにも気づかれないで遺失物を発見したとしたら、それを持ち主に返そうと努めるであろうか。それともポケットに入れてしまうであろうか。あなたは善悪の問題をあいまいにしないでであろうか。友だちの話をする時、その人が目の前にいない場合でもいる場合と同じように話すだろうか。失敗をした時、それを認めるだろうか。それとも悪いと知りながら正当化しようとするだろうか。顔見知りの人がいない所へ行っても、知っている人の前と同じように信頼に足る行ないをするだろうか。世の人々があなたのお蔭を受けているとあなたは思っているだろうか。それとも自分の望みのためには自ら働かねばならないことをあなたは本当に知っているだろうか。よい行ないをしようと心から努力しているだろうか。あなたは仕事をやりとげようと努めるだろうか。それとも働きすぎることを恐れて、のらくらしているだろうか。自分を支配しようではないか。自分のために働くのではないか。あなたが自分自身の同僚であるとして、自分を信頼できるだろうか。もしあなたの同僚が死んだとしたら、彼が生きている時と同じようにその家族に対してふるまうだろうか。もし同僚が健康を損ねたとしても、彼を公平にしかも寛大に扱い続けるだろうか。もう一度裏返して見てみよう。あなたは自分のために働きたいだろうか。自分自身と生活したいだろうか。これは確かに過酷な採点表である。しかし、時には自分を裏返しにして、他人のつもりで自分を正直に見つめるのも良いものである。

聖徒の道

1971年6月20日発行

発行人兼編集人 ウォルターR. ビルス

発行所 東京都港区南麻布5-8-10

末日聖徒イエス・キリスト教会 電話(442)7459

印刷所 太陽印刷工業株式会社

定価 100円

予約 一年間 1,000円 (外国4ドル50セント)